

# 日本語系統論はなぜはやらなくなったのか<sup>1</sup>

## －日本語系統論の現在・過去・未来－

長 田 俊 樹

総合地球環境学研究所・国際日本文化研究センター

キーワード：日本語系統論、混淆言語、言語類型論、服部四郎、上田万年。

### 0. 序

2001年4月から1年間、国際日本文化研究センターにおいて、共同研究会『日本語系統論の現在』がおこなわれた。この共同研究会がなぜ開催されるようになったのか。またどのような発表がおこなわれ、どのような成果があったのか。それらについては、この報告書の「はじめに」のところでのべたので、ここではくりかえさない。ただ、ここで指摘したいのは共同研究員をあつめるのに苦労したということだ。「日本語系統論だけはかんべんしてくれ」とか、「そんなものには興味はない」とか、正直いって、かなりの研究者にことわられた。なぜ共同研究員あつめに苦労したのか。共同研究会の幹事として、おもいをめぐらしてみたところ、つぎのような結論にいたった。それは、共同研究員になりたがらない理由を大別すると、つぎのふたつにわけられるということだ。日本語系統論にはふれたくないというタイプと、日本語系統論には関心がないというタイプのふたつだ。前者は、日本語系統論に関心があるが、そのことにふれるのはまともな言語学者がやるべきではないとかがえ、後者は日本語系統論などさいしょから眼中になく、言語学者の仕事ともおもっていない。いずれにせよ、日本語系統論がいかにも言語学の主流からはずれているか、それを如実にものがたっている。言語学をまなぶことは日本語系統論を追及することと同意語である。戦後の一時期には、そういつてもけって過言ではなかった。それなのに、戦後五十数年がたつと、日本語系統論を忌避する言語学者がじつにおおい。日本語系統論をまともに議論しようとする研究者にはわるいが、歴然としてそうした現実があるのだ。その事実を無視して、言語学者はただ日本語北方起源説、あるいは「日本語＝タミル語起源説」などを議論していればそれでいいのか。やはりその事実を直視すべきではないか。日本語系統論を忌避する言語学者がおおいなかで、日本語系統論だけが暴走していくから、ますます日本語系統論がさけられていくのではないか。どうもそういう悪循環におちいつているようにみえるのだが、いかがだろうか。

そこで、小論では、この共同研究会幹事の責務として、また筆者なりの独断と偏見にもとづ

---

<sup>1</sup>本論文は共同研究会での同名のタイトルによる発表にもとづく。発表に対し、いろいろとコメントをくださった方々に感謝する。また、草稿の段階で、藤原敬介君（京都大学院生）から誤字脱字の指摘をうけた。

く共同研究会の総括として、「日本語系統論はなぜはやらなくなったのか」について、私見をのべてみたい。二一世紀をむかえたいま、こうした問題を真剣に考察しておく必要があるのではないか。そうかんがえるにいたった。「日本語系統論の現在」と題する共同研究会の報告書に、日本語系統論がはやらなくなった理由をのべるのは、逆説をろうしているようで、共同研究会のポピン班長をはじめ、まじめに日本語系統論にとりくんでいる人々にもうしわけない。たしかに、筆者があつかうことができそうな「日本語系統論の現在」にふさわしいテーマがもっとほかにあったはずだ。たとえば、筆者の専門であるムンダ語をふくむオーストロアジア語族と日本語の系統関係を提唱する人がかつていた。民族学者の松本信廣だ（Matsumoto 1928 松本信廣 1931・1947）。その松本が提唱した系統論を、現在のオーストロアジア語族研究とてらしあわせて論文にまとめる。そういう方法のほうがずっと正統派である。また、ポピン班長には、そうした論文のほうが歓迎されただろう。しかし、すでにうえて指摘したように、こうした「日本語系統論」にのっとった論文をかいては、ますます「日本語系統論」を敬遠する研究者がふえていく。「日本語系統論」という問題の設定じたいがまがり角にきているのではないか。そうおもえて、しかたがない。そこで、このテーマをえらぶことにした。

「日本語系統論はなぜはやらなくなったのか」という問いには、かつて「日本語系統論がはやった」時期があったことを前提とする。つまり「なぜはやらなくなったのか」という問いと、「なぜはやったのか」という問いは不可分の関係にある。そこで、小論ではその「日本語系統論の過去」と「日本語系統論の現在」との比較をこころみる。それによって、「なぜはやらなくなったのか」、その原因をさぐりたい。しかし、ただやみくもに、原因究明をおこない、原因を羅列するのが小論の目的ではない。小論では原因のうち、言語学内要因と言語学外要因とにわけて、考察する。言語学者は前者のみを問題とし、言語思想史や言語政策史などを専門とする歴史家や社会学者は後者だけを問題としがちだ。そこで、言語学を専門とする筆者が後者にもめをくばる。それが小論の特徴である。

また、小論は日本語系統論の過去と現在をあつかうだけではない。日本語系統論の未来についても、筆者なりの推論を展開したい。この共同研究会のポピン班長とはちがって、筆者は日本語系統論の未来には悲観的である。しかし、今回の共同研究会をつうじて、絶望的だった日本語系統論の未来のみかたがすこしかわった。悲観的ながらも、一途の光明がさしている。そんなおもいをいだかせた。その具体的な根拠をあげると、日本人以外の日本語の歴史比較言語学的研究がかなりの成果をあげていることだ。偏狭なナショナリズムとむすびついた過去の「日本語系統論」がすでに破綻していることは、言語学者ならずとも、だれもがかんじていることである。しかし、のぞむとのぞまざるにかかわらず、いまやボーダーレス、グローバル化の時代である。日本人以外の日本語研究が日本語系統論の未来をきりひらく。この共同研究会はそんな可能性をかんじさせてくれた。班長に敬意をはらいつつ、未来にかすかな光明をみいだしたことは強調しておきたい。

では、小論の構成をみておこう。すでにのべたように、おおきく言語学内要因と言語学外要因にわけろ。ほんらい、日本語系統論は言語学内部の問題、つまり音韻対応の問題であった。とりわけ言語学者はそうかんがえがちである。したがって、ここで言語学外要因をとりあげる

ことに異論があるかもしれない。しかし、日本語の比較言語学的研究が、日本語系統論とよばれることによって、言語学以外の問題点が浮上してきたことも事実である。たとえば、言語学上の印欧語という概念とイギリスのインド支配が連関してかたられることがしばしばあったように、日本語と朝鮮・韓国語との同系説が日本の朝鮮半島支配に利用されたという指摘がある。こうした問題に対しては、言語のデータにだけ注意を払う「言語オタク」ではすまされない。言語学の政治性が批判の対象となっている。やはりそのことを無視して、日本語系統論を言語学内部の問題とすますわけにはいかないのではないか。そこで、こうした言語学、とりわけ日本語系統論の政治性について、筆者なりの意見を第3章でまとめてみたい。もちろん言語学以外の分野の研究者がとりあつかう問題を、すべて言語学外要因とみなすことができないし、言語学内要因と言語学外要因にはっきりと峻別されるわけではない。しかし、これまでのように、一方では、言語学者たちが音韻対応をもとめて言語学内要因だけを研究し、他方では、歴史家や社会学者たちが日本語系統論によってもたらされる言語学外要因によって言語学を糾弾する。これでは、日本語系統論をめぐる、言語学者とそれ以外の研究者の溝はいつこううずまらない。そこで小論では、言語学内要因と言語学外要因にわけて、それぞれの問題点をとりあげる。そのことで、これらが微妙に関連していることがわかるはずである。そして、その関連が明白になることによって、すこしはこうした溝がうずまるのではないか。また、溝がうずまることで、ふたたび日本語系統論（といった問題設定もふくめて）への関心をよぶことになるのではないか。そう期待している。

さらに、言語学内要因についても、ふたつにわけて考察する。日本語系統論にちよくせつかかわる言語学の学問上の問題点と、言語学内部における日本語系統論や比較歴史言語学をとりまく環境の二点である。これらをわけることで、後者が言語学外要因と密接にかかわっていることがあきらかとなる。また、前者についていえば、日本語系統論のバックボーンとなる比較歴史言語学のあたらしい研究成果を紹介することで、言語学にかかわらないが、日本語系統論に関心がある人々に、あたらしい情報を提供できるはずである。小論はそういった意図で構成されている。

## 1. 言語学における学問上の問題点

### 1.1. 比較歴史言語学理論

日本語系統論とはなにか。その問いにこたえるのはかんたんではない。その理由はいくつかある。その理由を比較歴史言語学の歴史をふりかえりながら、考察してみよう。

まず、日本語系統論という場合には、日本語には系統をおなじくする言語がかならず存在することを前提とする。日本語系統論に一生涯をついやした言語学者服部四郎はこのべている。

日本語の系統が未詳であることを知った青年は、それを知りたいという非常に強い欲求にかりたてられたのであった。

それ以来三十年の年月が流れた。しかし日本語の系統は依然として未詳である。(服部 [1958] 1999 : 3)

言語学者のなかには、服部四郎をもって、百年に一人の言語学者とよぶ人がいる。それはともかく、服部の言語学的素養や厳密を旨とした研究態度、アルタイ語を中心とした業績にはだれもが一目おいている。それだけはまちがいない。その服部をしても、さいしょから日本語と同系の言語があるという前提をけっしてくずさなかった<sup>2</sup>。未詳とあるが、未詳とは漢文風によめば「いまだつまびらかにせず」ということであって、いずれはあきらかになる日がくる。服部はそうしんでいたようだ。しかし、日本語と同系の言語がかならず存在するという前提を、はたして鵜呑みにすればよいのか。日本語には同系とみなす言語はなかった。あるいは同系とみなす言語は話し手がいなくなってしまうと、げんざい地球上には存在しない。そうした可能性はないのか。世界にはバスク語やブルシャスキー語のように、孤立言語とみなされているものもある。こうした日本語と系統をおなじくする言語がかならず存在するという出発点からして、日本人の起源論や日本文化起源論と同様、ナショナリズムの格好の標的となってしまう、いい意味でも、わるい意味でも、ほんらい言語だけを問題とするはずの言語学が政治性をおび、日本語系統論の悲劇（日本語系統論をオママゴトとみる人にとっては喜劇かもしれないが）がはじまったのではないか。

では、日本語と系統をおなじくするとはどういうことなのか。これを説明するためには言語学史をひもとく必要がある。そして、それは一九世紀に西欧でおこなわれた、印欧比較言語学による印欧語の発見にさかのぼる。ヨーロッパの古典語であるラテン語やギリシア語と、インドの古典語サンスクリット語がもともと共通の源（言語）にさかのぼるのではないか。イギリスのウィリアム・ジョーンズ卿がカルカッタ（現コルカタ）のベンガル・アジア協会でそう発言したのは、いまから二百年以上前の 1786 年のことである。そのジョーンズの発見から、ポップ、ラスク、グリムらによって比較文法がころみられ、シュライヒャーや青年若手文法学派の活躍などで、印欧比較言語学が確立する。その経緯は風間（1978）にくわしい。また、言語学の成立・発展については別稿（長田 2002）でのべたので、ここではくりかえさない。

こうした印欧比較言語学の成果から、系統をおなじくするという発想がうまれる。服部はつぎのように定義している。

もと同一の言語から分裂して継続的に伝承されるうちに異なった方向に変遷したために異なるに至った二つあるいはそれ以上の言語を「同系語」といい、それらお互いの間には「親族関

<sup>2</sup>ただし、服部は日本語の系統が証明不可能である可能性をつぎのように指摘している。「日本語の系統を明らかにし得る望みがないと言うのでは決してないが、その証明が不可能である場合もあり得ることは考慮に入れておいてよい」（服部 1999 : 33）。この指摘から、解釈のしよによっては同系の言語にこだわっていなかったようにみえる。しかし、証明が不可能であるという表現からいえるのは、あくまでも日本語と同系の言語がある（が証明の手だてがない可能性もある）という立場を堅持していたことはまちがいない。

係) (「親縁関係) があるという。そしてそれらの諸言語は同一の「語族」に属するといひ (それが大きい語族の一部分をなすときは「語派」という)、それらの起源となった言語を「祖語」という。(服部 [1958] 1999 : 14-15)

それでは、こんどは系統をおなじくすることをどうやって証明するのか。これも、服部から引用しておこう。

要するに二つあるいはそれ以上の言語の最も確実な比較研究は、語彙の全般的比較から音韻の対応を明らかにし、音韻法則を帰納し、それに基づいて文法的諸要素の対応を明らかにするものでなければならない。形態素の対応を背後にもった、音韻の対応と形態の対応とが、言語間の親族関係の決定的証拠となるのである。(服部 [1958] 1999 : 29)

この服部の指摘は 1950 年におこなわれたものである。この五〇年以上前の服部の方法論はいまでも有効である。そして、その方法論の確立はといえば、五〇年以上どころではない。厳密性を問題としなければ、一九世紀にはすでに確立していた。つまり、印欧語をモデルとして、比較歴史言語学の方法論は確立し、その方法論をあてはめることによって、印欧語族以外の系統が証明されていった。服部の指摘する方法論はなにも服部独自のものではない。ほかでもない、印欧語をモデルとして確立した比較方法にすぎない。その方法論は二一世紀になってもかわることなく、歴史言語学の教科書に記載されている。それだけ、この方法論は科学的根拠 (なにもをもって科学とよぶのかといった問いは重要であるが、ここでは問題としない) のある普遍的なものだとかんがえられている。

ここに系統論の問題点が浮上する。第一に、印欧語モデルではすべての言語の歴史があきらかにならなかったことだ。服部がいみじくも指摘するように、この厳密な比較方法を適用すると、「日本語の系統は依然として未詳」だという。そして、穏当にいつて、その結論はいまでも有効である。つまり、印欧語モデルの厳密なる適用によっては、日本語の系統はあきらかにならないことをしめしている。たしかに、この服部の指摘以後に、川本崇雄 (1980) の「日本語=南島 (オーストロネシア) 語族説」やベネディクト (Benedict 1990) の「日本語=オーストロ・タイ語族説」、あるいは世間的にはもっとも注目をあびた大野晋 (1980・1981・1994・2000) によって提唱された一連の「日本語=タミル語起源説」などがあつたが、いずれも服部が指摘する「形態素の対応を背後にもった、音韻の対応と形態の対応」が証明されたとはとてもいえない。誤解があつてはいけなないので明言しておくが、これらの諸説が証明されていないという見解は、けつして筆者個人のそれではない。この見解は、厳密な比較方法をまなんだことがある研究者たちのコンセンサスである。

ところで、印欧語モデルの厳密な適用ということからいえば、「系統が未詳」とされる日本語の場合や孤立言語とみなされているバスク語、ブルジャスキー語などが問題となるだけではない。じつは、すでに系統が証明済みとして教科書に掲載されている語族でも、印欧語と同様に、系統がかんぜん証明され、その語族の比較言語辞典まで完備している語族は、ドラヴィダ語

族やオーストロネシア語族など<sup>3</sup>、そうおおくはない。日本語の系統として、ふるくからいわれているアルタイ語族、あるいはウラル=アルタイ語族についても、印欧語族の証明度にはるかおおよぼ、異論もすくなくない<sup>4</sup>。また、筆者が専門とするムンダ語はオーストロアジア語族に属するといわれているが、オーストロアジア語族は証明されたというにはほどとおい。オーストロアジア語族の比較研究についても、1959年のピノウの研究 (Pinnow 1959) 以後、本格的なものはない<sup>5</sup>。研究者すらほとんどいないというのが実状である。ベトナム語やカンボジア語はオーストロアジア語族に属するといわれているが、ベトナムやカンボジアが国家事業としてオーストロアジア語族比較研究にでも着手しないかぎり、比較歴史言語学離れがすすむなか、筆者のようなへそまがりのをぞけば、しばらくはオーストロアジア語族の比較言語学的研究をおこなおうとするものは、あらわれないのではなからうか。話はそれた。ここで、つぎのことを指摘しておきたい。同系を証明する比較方法には、かなりの厳密性が要求される。いま認定されている語族ですら、どこまで証明されているかといえば、印欧語族の厳密さにはおよばない。語族のなかには、はたして系統関係が証明されているといえるのか。疑問視されているものすらある。そのことだけは強調しすぎても強調しすぎることはない。

そして第二に、印欧語モデルの適用では系統がはっきりしないことによって、つぎのような疑問点がなげかけられることになる。はたして印欧語モデルはどこまで適用可能なのか。比較言語学がみとめる唯一普遍的とみなされてきた方法論に問題はないのか。より具体的にいえば、もともと同一の言語が歴史の経過とともに分化していくモデル、いわゆる系統樹モデルがとわれることになる。その系統樹モデルとは逆の「言語は多元から統一に向うものだという」(服部 1999: 15) 考え方があつた。こうした考え方に対して、服部はこのべる。

多くの方言が統一されて一つの共通語となつたり、ある民族が隣接の民族の言語を話すようになるような現象は、従来の言語学でもよく知られていた事で、何も事新しいことはない。同時に我々は、印欧諸言語の「類似点」が同じ祖語に遡るといふ学説を依然として信じる者である。何となれば、その学説は、現在印欧系の諸言語を話しつつある諸民族がもと同一の言語を話していたことを意味するものでは決してないから。それらの諸民族はもと色々の言語を話していたであらう。しかし、それらは、いずれも同じ系統の言語を話すようになったのである。現在のこれらの諸民族の言語は、やはり同一の祖語に遡ると考

<sup>3</sup> ドラヴィダ語族の比較言語辞典については、Burrow & Emeneau (1961, 1984) があり、オーストロネシア語族の比較言語辞典については、Dempwolff (1934-1938), Tryon (ed) (1994) がある。

<sup>4</sup> たとえば、『言語学大辞典』をみると、「アルタイ語族説の支持者がある一方、・・(中略)・・これらの諸言語の類似点は相互影響とみなすべき部分が多く、親族関係を仮定する段階ではない」という意見があり、なかには「これらの諸言語の類似は、すべて借用関係によるものであつて親族関係に基づくものではない」とする見解もある。まして、ウラル語族とのウラル=アルタイ語族説となると、さらに疑問があり、印欧語族のようなコンセンサスがえられてはいない。

<sup>5</sup> さいきんでは、Anderson & Zide (2001, 2002), Donegan (1993), Zide & Anderson (2001) などがあるが、まだ比較言語辞典をつくるにはいたっていない。オーストロアジア語族のうち、モン・クメール諸語比較言語辞典については、ディフロース博士がコンピューターにデータをうちこんであつて、1990年に拝見させていただいたことがあるが、まだ出版されてはいないようだ。

える時に、始めていろいろの言語的事実を合理的に説明することができるのである。(服部 [1958] 1999: 15-16)

ここで、服部はいう。言語が「多元から統一に向う」ことは「何も事新しいことはない」と。そして、言語は「やはり同一の祖語に遡ると考える時に、始めていろいろの言語的事実を合理的に説明することができる」として、系統樹モデルを堅持している。また、服部は「現在印欧系の諸言語を話しつつある諸民族がもと同一の言語を話していたことを意味するものでは決してない」として、民族と言語の系統を混同することをいさめている。けっきょく、系統樹モデルを堅持することで、日本語の系統についても、「いろいろの言語的事実を合理的に説明」しようとするのが服部の立場といえる。しかし、ここで服部は、つぎのような疑問にはこたえていない。印欧語にとっては系統樹モデルがただしとみとめることには異論はないとしても、日本語をふくむ世界中のすべての言語が、はたして印欧語と同様の言語史をあゆんできたと断定できるのか。また、げんざい印欧諸言語をはなす「諸民族はもと色々の言語を話していた」という蓋然性がたかいことはみとめるが、それでは、印欧系の諸言語をはなすようになるまえに、どんな言語をはなしていたのか。そして、その言語はどのように印欧系の諸言語に影響をあたえたのか。あるいは、印欧系の言語に転換するとき、「いろいろの言語的事実を合理的に説明することができる」メカニズムはどうなっているのか。さいきん、こうした疑問はますます重要になってきている。というのは、後述するように、ピジン・クレオール語研究の進展や印欧語をこえたノストラティック大語族の提唱とともに、服部が日本語の系統をあきらかにしようとして研究してきた時代とは状況がいちじるしく変化したからである。

小論では、じゅうらいの比較方法を厳密に適用した場合には、「日本語の系統は依然として未詳である」とする服部の見解を基本的に支持する。たぶん、これが日本語系統論がゆきづまった原因であることにはまちがいなさろう。しかし、じゅうらいの印欧語中心的な比較方法だけを、日本語系統論、あるいは日本語起源論や日本語形成論に適用する必然性はない。じじつ、それをこえようとする学説がある。ここではこうした学説をとりあげたい。とりあげる理由は、そうした学説はうえであげた服部の指摘以後に、研究がさかんになったものがおおいこと、そして混淆言語説などをのぞくと、日本ではあまり紹介されてこなかったこと、の二点である。そこで、以下の四つの学説を中心に紹介し、それらと日本語の起源をめぐる論争とのかかわりをさぐっていきたい。

ここで紹介するのはつぎの学説である。

- (1) 混淆言語説
- (2) ノストラティック大語族
- (3) グリーンバーグの学説
- (4) 言語類型論からのアプローチ。

(1) はふるくからある学説だが、実証的な研究は近年飛躍的にすすんでいる。(2) と (3)

はじゅうらいの語族をもっとおおきな語族に還元させようとするところみである。(4)は、共時的レベルで、世界中ではなされている言語を、ある特徴の有無などをもちいて分析し類型化をおこない、その特徴の分布から、なにか歴史的に有意義なものをみいだそうとする研究である。それぞれについて、具体的にみていこう。

(1)はいちばんふるい。その起源は、一九世紀に印欧比較言語学形成期に、青年文法学派に反対したフーゴ・シューハルトにまでさかのぼるといわれる<sup>6</sup>。また、うえに引用した服部の「言語は多元から総合に向うものだという」指摘の直前には、「近時ソヴィエト言語学が紹介されて」とあるように、ソヴィエト言語学も系統樹モデルには反対した<sup>7</sup>。さらに、トルベツコイは系統のことなる隣接する言語が共通の特徴を有することをバルカン半島の例でしめし、こうした現象に言語連合、あるいは言語同盟 (Sprachbund) という用語をあたえている (Trubetzkoy 1928)。系統樹モデルだけでは説明できない現象の研究に、先鞭をつけたものとして評価されている。この言語連合はのちに、インドの事例を検討したエメノー (Emeneau 1956) によって、言語領域となづけられ、こんにちではこの英語名 *linguistic area* が一般的に使用されている。こうした前史のあと、系統樹モデルに対抗する学説として、体系的に研究がされるようになったのがピジン・クレオール研究である。

ピジン・クレオール研究とはなにか。言語学を専門としない読者のために、説明しておこう。ピジンとは二つ以上の言語が接触したさいに、それぞれの言語要素が関与して発生する新言語のことをさし、その言語をピジン語とよぶ。新言語形成にあたっては、それぞれの言語の文法や音韻の簡略化をとまなうのが一般的である。ピジンは英語の *business* を語源とするというのが一般的な解釈だ。もともとはメラネシアにおいて、英語、中国語、オーストロネシア系の現地語が接触することで発生したピジン英語から、ピジンという用語は使用されるようになったが、いまでは、そのほかの地域における同様の現象はすべてピジンとよばれている。また、ピジンが発生するプロセスをピジン化とよぶ。いっぽう、クレオール語はピジン語が母語として継承されていったものをさす。逆にいえば、ピジン語は母語話者をもたない。すなわち、それぞれことなった母語話者が市場や奴隷貿易などによる強制移住等々で母語以外の話者としてあうとき、おたがいの意思疎通の手段として、そのいずれの母語ともことなる言語を使用するケースをピジンとよぶ。しかし、母語よりもピジン語を使用する頻度がおおくなるとか、ピジン語のほうが便利だといった諸々の理由によって、これまでの母語をすて、ピジン語を母語として、子供たちが習得していくと、このピジン語がクレオール語となる。また、このプロセスをクレオール化とよぶ。言語学ではピジンとクレオールの厳密な用語の区別をおこなっているが、

<sup>6</sup>フーゴ・シューハルトについては、Schuchardt (1979・1980) が英語でよめる。日本語では小林英夫・林長男の翻訳 (1935) や小林英夫 (1936) の紹介、そして亀井孝 (1971: 279-305) の紹介などがある。  
<sup>7</sup>ソヴィエト言語学については、戦後すぐに、ずばりその名を題名としたブイコフスキー『ソヴェート言語学』(1946) が出版されている。この服部が執筆した1950年前後には、雑誌『思想』に村山七郎 (1950) が「ソヴィエト言語学とスターリンの批判」と題する論文を発表し、1951年の『文学』2月号では小林英夫「スターリンの言語観」をはじめ、「今日における言語の問題」と題する小特集ではソヴィエト言語学の問題が中心をしめていて、ソヴィエト言語学について、議論されることがおおかった。そのへんの経緯については田中克彦 (2000) がくわしい。



一般的には、ピジンとクレオールの違いはそれほど重要ではない。じっさい、混濁言語 (Mixed language, Mischsprache) という場合にはピジン語もクレオール語もふくまれる。

1959年に、ピジン・クレオール研究の第1回国際会議が開催されたとき、参加者はたった一三名であった (トッド 1986: 202)。このエピソードがしめすように、ピジン・クレオール研究が本格的におこなわれるようになったのは1960年代以降である。ピジン・クレオール研究があまり注目をあつめてこなかったのには、それなりの理由がある。ひとつには、これまでものべてきたように、比較言語学が系統樹モデルに依拠している以上、系統樹モデルを否定するような研究はしにくかったことがある。もうひとつには、ピジン語やクレオール語といったものは、たとえばピジン英語は英語ができない「未開」人たちの過失によって生まれたにすぎず、世界の主要な支配者言語のデキソコナイとみなされてきたことも、研究がおくれた一因だろう。「すべての人間はうまれながらにして平等である」という近代社会のスローガンにならば、ほんらい「すべての言語はうまれながらにして平等である」はずだ。ところが、こうした大原則をかかげていながら、人間としての地位をあたえられてこなかった被差別者たちがいたように、ピジン語やクレオール語は言語としての地位すらあたえられてこなかったのである。

しかし、研究がすすんでくるにつれて、英語やフランス語といった支配者言語とはかかわらないクレオール語や簡略化をとまなわないピジン語の存在があきらかになりつつある。すなわち、支配者言語のデキソコナイだけではない、クレオール語やピジン語がしられるようになったのである。また、こうした植民地支配とちよくせつ関連しないような言語接触の研究もすすんできた。とくに、あとで詳述するが、バンツ語系言語とクシ語系言語の接触からうまれたマア語などは、バンツ語系から文法構造 (形態統語法) を、一方、クシ語系から語彙を、それぞれ継承 (あるいは借用) しからみあつてできた言語とみなされ、注目をあつめている<sup>8</sup>。

ピジン・クレオール研究は、まだまだコンセンサスがえられるような理論をもつにはいたっていない。その起源についても、おおきくわけて、(A) 普遍説 (B) 上層言語説 (C) 基層言語説の三種がある (McWhorter 1997: 2-10, Sebba 1997: 168-202, Lefebvre 1998: 6, DeGraff 1999: 6-8, Singh 2000: 37-68, Holm 2000: 14-67)。それぞれ説明をくわえておこう。

(A) 普遍説は言語獲得と関連づけ、あらかじめ生得されたプログラムによって、クレオール語が発生するという「生物プログラム (bioprogram) 説」(ビッカートン 1985) が有名である。その後、ビッカートンは「生物プログラム説」を修正したが、言語の起源の問題とこのクレオール語の起源とを関連づける立場にはかわらない (ビッカートン 1998)。ロメイン (1997: 215) が「生物プログラムが作用していることを立証するために必要な状況の下で、クレオール語を獲得したと言えるこどもは、現在のところ1人もいないのだ」と指摘するように、チョム

<sup>8</sup> マア語については、Mous (1994), Thomason (1997) などがある。さいきん、わかい日本の大学院生がマア語を研究しており、その成果の一部が刊行されている (安部 2002)。それによると、マア語には内マア語と外マア語があり、ここで注目されている言語は内マア語である。その内マア語について、「クシ系言語のバントゥ化」、「バントゥ系言語のクシ化」、「クシ系言語からのバントゥ系言語に言語置換後の、クシ系言語の語彙の再獲得」など、「それぞれの研究で異なる意見が提示されているが、未だ意見の一致はみない」(安部 2002: 10) という。こんごの研究成果をみまもりたい。

スキーの普遍文法と同様、あくまでも理論上の普遍性にもとづく説であって、実証されているわけではない。じっさいのクレオール語の調査をおこなった研究者のなかでは、この普遍説にたつ人はあまりいない。ただし、実証的レベルでクレオール語に、語順がSVOであるとか、屈折する接辞をもたないなどの普遍性が報告されている (McWhorter 1998, Muysken 2001)。(B) 上層言語説はクレオール語の起源を上層言語におく。上層言語とは、一般的には植民地下における支配者の言語を上層言語とよび、被支配者の言語を基層言語とよんでいる (Singh 2000 : 128)。しかし、植民地的構図だけではおさまらないケースもあるので、語彙提供言語を上層言語とし、文法構造に影響をあたえる言語を基層言語とする、ロメイン (1997 : 208) のような言語学者もいる。また、Sebba (1997 : 25-6) は、上層や基層という用語に上層の優越性や基層の劣等性を包含させてはならないことを明記している。とくに、上層 (superstrata) という用語を語彙提供言語 (lexifier) や贈与言語 (donor) といいかえて、いっさい使用していない概説書 (Arends, Muysken & Smith 1995) もあり、用法がゆれている。ただし、支配者の言語という意味での上層言語が語彙提供言語ではない場合もあるので、これはたんなる用語のいいかえとはいえない。さらに、上層、基層なる用語では言語接触の実態をあきらかにできないとして、受容言語 (recipient language) と源泉言語 (source language) という用語を提案する研究書 (Coetsem 2000) もある。このように、さいきんの概説書や研究書においても、まだまだコンセンサスにはいたっていない。その用法のゆれは、こんごの研究によって、統一されることをねがうしかない。では、この上層言語起源説とはどのようなものか。具体的には、おもにヨーロッパ起源の上層言語の修得が不完全なことによって、クレオール語が発生したとか、上層言語そのものに問題があって、船乗りがはなす職業的方言を被支配者たちが修得したのが起源であるといった、上層言語の変異体がクレオールの母体となったとみなす説である。これらの説はいくつかのクレオールにはあてはまるようだが、この上層説ですべてのクレオール語の起源が説明できるわけではない。

(C) 基層言語説は (B) とは逆に、クレオール語の起源を基層言語におく。つまり、クレオール語の基本的な構造は基層言語のものであって、基層言語こそが重要だとみる。とくに、カリブ海のクレオール語では、おなじ基層言語にことなつた植民地支配者言語がかぶさってきたジャマイカ・クレオール語、ハイチ・クレオール語などが類似した構造をもつことから、地域的に基層言語説が有効であることは証明されている。しかし、すべてのクレオール語の起源を基層言語にもとめることはできない。

ここで、クレオール語の起源説を紹介したのは、とてもコンセンサスがえられる状態ではないことをしめしたかったからである。このほかにも、単一起源説と多元起源説 (Sebba 1997 : 72-7)、ヨーロッパの言語が介在する場合と介在しない場合 (Muysken & Smith 1995 : 9-10)、急激に突発的に発生するのか、段階的にじょじょに発生するのかといった発生のシナリオで分類する場合 (Thomason 2001b : 177-188) など、起源説の分類のしかたもさまざまである。また、さいきんでは、ピジンを二言語併用 (バイリンガリズム) の一例として考察し、コード変換とクレオール起源を関連させた研究 (Myers-Scotton 1998, 2002, Muysken 2000) や第二言語習得と関連させて言語接触を考察する概説書 (Winford 2003) もある。ピジン・クレオ

ール語をどのように研究するか。また、ピジン・クレオール語の分析から出発して帰納的になにかをみちびこうとする研究者と、言語の進化など、理論的にモデル化した演繹的方法をとる研究者とで、現段階においては、かなりのへだたりがみられる。データがまだまだ網羅的にそろっているわけではないので、とてもコンセンサスがえられるような状況にはない。

さいきん、注目をあびるようになった混淆言語がある。それは、1990年代以降のピジン・クレオール研究の指針をしめした Thomason & Kaufman (1988) では“massive grammatical replacement”とよばれていた現象で、文法構造はある言語からなり、いっぽう、語彙はべつのある言語からなるといった言語、うえであげたマア語のような言語をさす。これをピジン・クレオール語と区別するのが一般的である。さいきんの概説書をみると、Thomason (2001b:271) はこう指摘している。

“a mixed language is ‘a language that did not arise primarily through descent with modification from a single earlier language.’, includes two subtypes: pidgins and creoles on the one hand, and bilingual mixed languages on the other. The latter ‘derive one or more grammatical subsystems (including their lexicon) from one language and the other grammatical subsystem (s) from another language.’”

この Thomason の bilingual mixed languages (この用語を使用している概説書としては Winford 2003 がある) という用語に対し、この現象にいちはやく注目した Bakker and Muysken (1995 : 42) は“language intertwining” (かりに訳語をつくれれば、からみあい言語) とよんでいる。さらに、Bakker (2000b : 586) が“This process has only recently been established as an explanation for the nature of a few dozen languages, and its existence has by now been accepted by many linguists” と指摘するように、この「からみあい言語」が認知されるようになったのは、ごく近年のことである。

日本語系統論のなかで、混淆言語説はかなりふるくからある。ポリヴァーノフ、村山七郎、崎山理、そして、今回の共同研究員の一人である板橋義三などが、その論客である。また、あまりしられていないが、南島語族起源説の提唱者として紹介した川本崇雄も、タミル語起源説でしられる大野晋も、日本語の形成にあたっては混淆があったという立場である<sup>9</sup>。ただし、混淆に関与した言語がことなる。また、何語を基層言語とし、何語を上層言語とするのか。上記の説に共通したコンセンサスがあるわけではない。いっぽう、うえになんとか引用した服部はこの混淆言語について、どうみていたのか。服部はこう指摘する。

<sup>9</sup>川本 (1980) によると、南島語が基層をなし、その後アルタイ的言語がかぶさったとみるじゅうらいの混淆説とはぎゃくに、アルタイ的言語が基層をなし、南島語が色濃くのこったとみている。いっぽう、大野 (2000 : ix) は、①オーストロネシア語の段階、②タミル語受け入れの段階、③古代朝鮮語受け入れの段階、④漢語の受け入れの段階の4段階をへて、日本語が形成されたとみている。ただし、大野説の初期の段階 (大野 1980) では日本語形成に関与した言語としてアルタイ語がはいっていたり、大野 (1994) ではタミル語単独の日本語起源説を展開していたり、混淆言語説についての見解はころころとかわえている。

日本語の系統を明らかにすることは極めて困難であるが、そうかといって、日本語は他の諸言語と親族関係を有しないのだと断定することは、もちろんできない。また、日本語は混淆語であるなどと断ずることも危険である。完全な意味での混淆語は容易に成立し得ないであろう。たとえ語彙の圧倒的部分が外国語からの借用であっても、音韻体系と形態が固有のものである限り、その言語は混淆語となったと見ることができない。音韻体系と形態が二つの言語の混淆であるというような言語は、恐らく有り得ないであろう。(服部 [1955]1999 : 34)

この服部の指摘は示唆的である。「混淆言語はありえない」というのが、印欧比較言語学の呪縛から、なかなか解放されなかった言語学者たちの公式見解であった。いまでもその立場を堅持する研究者はおおい。これは印欧比較言語学が親族関係を基本とする系統にささえられてきた以上、その系統を否定することになりかねない混淆言語説を承認することは、いわば自分の首を自分でしめることになりかねない。したがって、反対するのはどうぜんなのである。たしかに、混淆言語説に反対するのは、これまでの言語学史をみるかぎり、いたしかたない側面がある。しかし、もっとこわいのは、混淆言語説を否定するあまり、系統至上主義におちいることである。つまり、血統書つき純血種である犬のほうが、雑種よりも価値がたかいとみる人がおおいように、言語も系統がはっきりとしなければ価値がひくいといった発想におちいってしまうことである。日本語のような由緒正しい言語が「混淆言語」などではありえない。だから、いつか日本語の系統はあきらかになるはずである。いや、系統をあきらかにしなければならぬ。こういう強迫観念にとりつかれかねない。そのけっか、それがナショナリズムとむすびつき、政治性をおびてくる。そこに、日本語系統論のおおきな弱点があるようにおもえるのだが、いかがであろうか。卑見をのべさせてもらうならば、「日本語系統論」というわくぐみをとってはらって、混淆言語説も視野にいれて、日本語のなりたちをかんがえる時代になったのではなからうか。

話が言語学外要因に、およんでしまった。言語学内の言語理論としての混淆言語説にもどろう。たしかに、服部の時代からいえば、混淆言語の研究はすすんだ。うえであげた「からみあい言語」の存在は、すくなくとも、ピジン・クレオール研究者のなかでは、いまや認知される場所となった。また、筆者じしんも混淆言語説、あるいは「からみあい言語」説によって、日本語の形成過程が解明される可能性はまったくないなどと、はなから否定しようとはおもわない。しかし、混淆言語や「からみあい言語」の存在がみとめられたからといって、すぐに日本語は(たとえば南島語とアルタイ語の)混淆言語、あるいは「からみあい言語」であると結論づけることはできない。この点は強調しても強調しすぎることはない。なぜなら、「からみあい言語」の存在や生成は、現時点でたしかに確認されているが、過去に「からみあい言語」、あるいはおおきな意味の混淆言語であったと証拠づける「いろいろの言語的事実を合理的に説明することができる」メカニズムは、いっこうに解明されていないからである。系統にもとづく言語史の解明については、印欧比較言語学の成果によって、厳密な方法論が確立している。しかし、ある言語が「からみあい言語」や混淆言語であるかどうかは、その言語がからみあって

いく、あるいは混淆していく過程を観察できてはじめて、証明されるものである。残念ながら、過去に「からみあい」や混淆がおこったという証拠は、音韻法則といった規則性によってみいだされるわけではないし、形態論や統語論のなかにも、まだみいだされていない。しょうらい、みいだしえるかどうかもわからない。

この混淆言語説の紹介をおえるにあたって、つぎの一節を Thomason (2001b: 218) から引用しておこう。

“Probably the most obvious lesson to be learned ... is that the study of bilingual mixed languages is still infancy. The second most obvious lesson is that the wide range of variation already evident in the languages currently available for study is likely to be the proverbial tip of an iceberg. ... the third most obvious lesson here for students of bilingual mixed languages: anyone who believes that sweeping generalizations or strong predictions about these languages are possible in our current state of knowledge is at best overoptimistic”.

ここからいえるのは、「からみあい言語」の研究によって、なにかがすぐにいえるようになるわけではないことを、トマソンはいましめている。こうした研究の動向をしばらくみまもっていくしかない。

なんどもくりかえすように、日本語の形成に、二つ以上の言語が関与した蓋然性はけっしてひくいわけではない。また、その混淆言語説によって、日本語の形成を説明しやすい点があるかもしれない。しかし、さりとて、混淆言語説によって、言語学的に、どこまで「いろいろの言語的事実を合理的に説明することができる」のか、と質問されれば、正直いつてこたえに窮してしまう。というのは、親族関係の決め手となる規則的音韻対応のような、混淆言語を決定するような一般化は、管見のおよぶかぎり、これまでいられていないからだ。また、これまでいられているクレオール語の普遍的特徴、たとえば、クレオール語はSVO言語だといわれているが、日本語はSOV言語で、この普遍性にはあてはまらない。この一般化が例外のないものであるならば、日本語はクレオール語ではないことになる。まだまだ研究者たちのあいだに、混淆言語説に対するコンセンサスがえられるまでの道はとおい。そして、コンセンサスがえられないかぎり、日本語＝混淆言語説がすんなりと承認される可能性はすくないのではなからうか。それが筆者の結論である。うへのトマソンの指摘に、おおざっぱな一般化が可能だとかんがえることは超楽天主義的 (overoptimistic) とある。しかし、超楽天主義者こそがあたらしい理論をうみだすのではないか。筆者などはそうおもうので、「からみあい言語」研究からなにかがうまれる可能性も十分のこされている。いずれにせよ、混淆言語をふくむ言語接触の問題は、もっともホットなトピックの一つであることにはちがいない。こんごの研究成果に期待したい。

(2) ノストラティック大語族。この(2)から(4)の概要は、すでに長田(1998)で紹介したことがある。そちらをごらんになっていない方のためにも、その説明と重複するが、こ

こでもういちど、紹介しておく。まず(2)からはじめよう。

「ノストラティック」の名称はラテン語のつぎのことばにもとづく。nostrās 'our countrymen'。またこの名称はデンマークのペデルセンが提唱したものである (Pedersen 1903 : 560)。しかし、こんにち、ノストラティックの名をたかめたのはロシアのイリッチ・スヴィティチ (1934-1966) である。かれの死後、「ノストラティック語源辞典」が三回にわけ (1971, 1977, 1984) 出版され、Shevoroshkin ed. (1989 : 136-167) が重要な部分を英訳している。彼の提唱するノストラティック語族とはつぎの語族からなる。印欧語族、アフロ・アジア語族、ウラル語族、カルトヴェリ語族、ドラヴィダ語族、アルタイ語族の六つである。その語源辞書には 700 語以上の対応語彙が掲載されている。しかし、ロシア語でかかれていたことやソ連の社会主義膨張政策との関連をうたがわれて、西側にはまったくうけいれられなかった。げんに、八〇年代後半から九〇年代にかけて出版された日本の『言語学大辞典』(亀井・河野・千野編。1986-1995) やオックスフォード大学出版の国際言語学百科事典 (Bright ed. 1992)、ルートリッジ社の言語学辞典 (Bussmann ed. 1996) にはこの「ノストラティック語族」は登場しない。ところが、Shevoroshkin & Markey ed. (1986), Kaiser & Shevoroshkin (1988), Shevoroshkin ed. (1989, 1992) など、英文で紹介されるようになると、ロシア以外でもかなり注目されるようになってきた。とくに、アメリカでは、つぎにのべるグリーンバーグの研究とともに、『ニューヨーク・タイムズ』や『US ニュース・アンド・ワールドレポート』など、マスコミにも登場し脚光をあびてきた<sup>10</sup>。ときあたかも、ソ連が崩壊した前後と一致するのは、たんなる偶然とはおもえない。

イリッチ・スヴィティチが提唱するノストラティック大語族はじゅうらいの六語族からなる。そのことはすでにうえでのべた。しかし、ノストラティストの間で、その構成言語に一致があるわけではない。たとえば、Dolgopolsky (1986) はドラヴィダ語をノストラティック語族から除外しているし、Starostin (1989) はアフロ・アジア語族を除外し、エスキモー・アリュート語をくわえている。さらに Bomhard and Kerns (1994) によるノストラティック語族は印欧語、アフロ・アジア語、ウラル・ユカギール語、エラモ・ドラヴィダ語、アルタイ語、シュメール語からなる。また祖形についても、まだまだ一致した見解はない。とくに、Bomhard & Kerns (1994 : 12-19) が指摘するように、モスクワ学派とボンハードたちの祖形をめぐる意見のへだたりはかなりある。しかし、Campbell (1998) がまとめるところでは、ノストラティック語族は印欧語、ウラル語、ユカギール語、アルタイ語、朝鮮語、日本語からなるというのが最大公約数で、そのほかについては、ノストラティック語族に属さないまでも、ノストラティック語族とのさらなる系統関係をみとめるというのがノストラティストの立場だという。

このノストラティックは、じゅうらいの比較方法を堅持している。つまり、規則的音韻対応にもとづく対応語彙表や語源辞典を用意している。伝統的な比較方法を堅持するハードコアな

<sup>10</sup> ノストラティックに関する研究は、長田 (1998) で紹介して以後も、Salmons and Joseph (eds) (1998), Renfrew and Nettle (eds) (1999), Renfrew, McMahon and Trask (2000) などの論文集が刊行されている。欧米ではまだまだ人気は落ちていない。いっぽう、日本では、管見のおよぶかぎり、佐藤 (1994) 以外に、ロシア語文献まであつた、しっかりした論文はまだないようだ。

比較言語学者としていられている、この共同研究班の班長は、つぎのようにのべて、条件をつけたうえで、ノストラティックを支持している。

“Altaic data seem to support Nostratic theory in general, although Nostraticists frequently use them indiscriminately, and significant clean-up work must be done before jumping to any far-reaching conclusions” (Vovin 1999 : 384)

このノストラティック大語族はなぜ日本語系統論のなかに登場しないのだろうか。筆者が想像するに、どうもこうした大語族は日本語系統論にはなじまないようだ。かつて、岸本通夫という人が『ユーラシア語族の可能性』(1971)を出版したことがある。この岸本の説によれば、印欧語とウラル・アルタイ語、そして朝鮮語、日本語、さらにアイヌ語やチュクチ語などが同系であるとして、それをユーラシア語族とよんでいる。このノストラティック大語族にちかい。じじつ、岸本(1971:7)の第1章にはペデルセンのノストラティックへの言及もある。また、後述するグリーンバーグの説とは、名称もおなじ、構成言語も酷似している。しかし、幸か不幸か、この岸本説が人口に膾炙することはなかった。ところが、この岸本説がまったく注目されなかったのに対して、大野晋の説はマスコミにもとりあげられた。その大野晋はドラヴィダ語族よりもタミル語をえらんでいる。そのために、奇妙なタミル人移住説を展開するはめにおちいつているが、それでもドラヴィダ語族ではなく、タミル語に固執している。さらに、日本語系統論では、かつて安田徳太郎(1955)によってレプチャ語が組上りにのせられたことがある。これもレプチャ語が属するチベット・ビルマ語族ではなく、あくまでもレプチャ語であった。大野も安田も、言語学的な常識からは逸脱して、語族ではなく個別言語を日本語の起源とみなしている。このことからかんがえるに、どうも語族や大語族に日本語が属しているのでは、日本語系統論ではなくなるのかもしれない。そのことは、はからずも、日本語系統論が言語学の問題ではないことをしめしているといえるかもしれない。言語学者としては、日本語とタミル語の関係を論議するより、このノストラティック大語族について、もうすこし議論をするほうが、はるかに生産的ではなからうか。

(3) グリーンバーグの学説。つぎにのべるグリーンバーグの説は、音韻対応を無視する。その点で、じゅうらいの方法論からはずいぶんことなる。かれの提案する比較は多角比較(multilateral comparison)とよばれている。多角比較とは言語の系統をかんがえるさいに、言語学以外の成果を積極的にとり入れる方法論である。多量比較(mass-comparison)ともメガロ比較(megalo-comparison)ともいわれる。具体的には、グリーンバーグがおこなった「アメリカ先住民諸語」の分類にもちいられた方法論をいう。グリーンバーグは「アメリカ先住民諸語」をつぎの三つに分類する。アメリンド語族、ナ・デネ語族、アリユート・エスキモー語族。そして、この分類は言語学的にも、歯列の構造分析研究や遺伝学の成果とも一致するとして、提案したのである(Greenberg 1987a,b, Greenberg, Turner II, and Zegura 1986)。

このグリーンバーグの研究はおおきな反響をよんだ。とくに、自然科学者のあいだでの反響はおおきく、遺伝学者たちは人間の進化を遺伝学、考古学、言語学のデータを積極的に利用す

ることに賛成を表明した (Cavalli-Sforza, Piazza, Menozzi and Mountain 1988)。このグリーンバーグの研究方法は自然科学者の後押しもあって、科学雑誌である『サイエンス』や『ネイチャー』などにもとりあげられ、日本でも『科学』が紹介している。こうした科学雑誌に言語学の研究が掲載されることはほとんどない。これはグリーンバーグの研究がいかにもほかの分野の研究者に衝撃をあたえたか、そのインパクトのおおきさをしめしているといえよう。

ところが、言語学者はおおむねグリーンバーグの「アメリカ先住民諸語」の分類とその方法論に反対している (Chafe 1987, Goddard 1987, Campbell 1988, Adelaar 1989, Matisoff 1990, Rankin 1992 など)。では、言語学者はなぜ反対するのだろうか。それはグリーンバーグが主張する方法論が、これまで歴史・比較言語学者が習得してきた比較方法をかんげんに無視しているためである。グリーンバーグは二つ以上の言語が系統関係をもつかどうかという問題のたて方をとらない。そのかわり、言語はいかに系統的に分類されるかを問題とする。そして、その分類は多角比較によっておこなわれる。多角比較とはそれぞれのグループの自然な階層を発見するためにおこなわれ、基礎語彙や文法標識について、多数の言語を同時にみることであきらかになるという。つまり、これまでは音韻対応を重視していたが、それよりも分類の境界線を見つけるための規準をあらゆる分類からみようとする。そのため、その分類は基本的に他の方法による歴史的分類とおなじになる。ここであげられている他の方法とは、生物学的な分類や出自と対応する系図、文字体系の分類などをさす (Greenberg 1987b : 648)。こうして、遺伝学などとの共同研究がなりたつというわけである。グリーンバーグの方法はかなり乱暴な印象をうけるが、それは厳密な音韻対応といった伝統的な比較方法を無視しているからである。そのぶん、遺伝学など、他の分野での分類法を導入し、グリーンバーグじしんの言語学的分類の正当性を主張する。しかし、言語学者はほかの分類にうつるまえに、その言語学による系統関係の証拠というレベルで、異議をとなえている。

グリーンバーグはこの共同研究会が開催されていた 2001 年 5 月になくなった。そのなくなる直前まで、かれの提唱するユーラシア語族の語源辞典を完成させることに集中し、そのさいごの原稿がしあがったのは 2001 年 3 月だったという。そのさいごの著作の第 1 巻 (Greenberg 2000) によると、日本語はユーラシア語族に属し、ユーラシア語族はつぎのように分類されている。

- ( I ) エトルリア語
- ( II ) インド＝ヨーロッパ語
- ( III ) ウラル＝ユカギール語
- ( IV ) アルタイ語
- ( V ) 朝鮮語＝日本語＝アイヌ語
- ( VI ) ギリヤーク語
- ( VII ) チュコティアン語 ( チュクチ語、カムチャダール語 )
- ( VIII ) エスキモー語＝アリュート語



まず、この表で目につくのは、朝鮮語と日本語とアイヌ語を一つのグループとみなしている点である。これに関連して、おもいだされるのは、小論でなんとか引用した服部一郎郎による、つぎのような指摘である。

私は今まで、アイヌ語は系統的には日本語と関係がなさそうだとばかり思っていたので、多少の類似に気づいても、それを両言語の親族関係と関連づけて考えることをしなかった。ところが頭を切りかえて両言語を比較してみると、親族関係に起因すると考え得る類似点がかかり目に映ってくる。そればかりでなく、アイヌ語と朝鮮語との間にもかなり類似点が見出される。とはいえ、日本語と朝鮮語との距離は四千七百（最下限）である蓋然性があるが、アイヌ語とこれらの言語との距離はさらに遠く、同系であるとしても、七千余年ないし一万余年であろう。（服部 1999 : 146）

この服部の指摘は 1955 年になされた。しかし、服部の期待とはうらはらに、アイヌ語と日本語の系統関係を研究した日本人研究者はいない。ただ、本論文集の中川論文が指摘するように、はっきりと「形態素の対応を背後にもった、音韻の対応と形態の対応」をみいだすのはむずかしい。それがアイヌ語研究者の一致した見解ではなからうか。とすれば、この三言語をおなじグループとみなす根拠はどれほどたしかなのか。そうした疑問がうかぶ。

もっとも、グリーンバーグが証明をめざす、いわゆる遠隔系統関係では、音韻対応が重要な位置をしめるわけではない。じつ、この Greenberg (2000) では、比較音韻論が四〇頁にみえないのに対し、文法的証拠は一八〇頁におよぶ。後者は七二項目にわけられ、巻末には索引もある。しかし、その文法的証拠といわれても、すなおにうなずくわけにはいかない。ここにあげられた人称代名詞や指示詞がどこまで類似しているといえるのか。また、それらが類似していれば、時間的なスパンをながくすることで、遠隔系統関係があるとみとめられるといえるのか。これらの疑問はこのころ。また、比較語彙集となっている Greenberg (2002) では、437 語が同源語としてあげられている。こちらの語彙となると、もっと疑問がおおきくなる。たとえば、258 番目の MAKE *kur* の対応語として OLD JAPANESE *kuwa* ‘fortress, embarkment (embankment のミスプリント), quarter’ をあげているが、《作る》という基本的な動詞を《郭》と対応させるのはいかがなものか。これはこじつけとみなされても文句はいえまい。また、262 番目の MANY/MUCH *mel* の対応語として、OLD JAPANESE *mor-* ‘to fill, heap up,’ modern Japanese *moro-* ‘heap up,’ *moro* ‘all’ とあるが、現代日本語は *mor-u* 《盛る》だし、*moro* 《諸》とはあきらかに語源がちがう。さらに、いちばんおどろくのは、321 番目の SAIL(v.) *maru* である。これには日本語の *maru* ‘ship’ とギリヤーク語の *mry, mra* しか語源辞書に掲載されていない。まず『時代別国語大辞典・上代編』（三省堂）には、この「丸」はのっていない。『日本国語大辞典』（小学館）をみると、『まる』（麻呂）の変化したもの、室町時代ごろから『まる』の形となる」とある。もともとは「牛若丸」など、人間にたかわっていたが、のちに船の名にもちいられるようになった。日本語の辞書をみるかぎり、ユーラシア語族の語源辞書に掲載されている理由がみあたらない。また、日本語とギリヤーク語だけをも

って、なぜユーラシア語族の語源なのか。しかも、なぜ動詞の《船出する》なのか。疑問はつきない。

以上、三語だけあげたが、もっとこまかくみていくと、こうした疑問符がつく対応語がおおしい。これらは、いわば氷山の一角にすぎない。とくに、語形を優先させるために、意味の対応には疑問点がおおすぎる。専門でもない筆者がすぐわかるような幽霊対応語をもちだすようでは、ユレイシア語族と揶揄されてもおかしくないのではないか。

グリーンバーグの死去にあたっては、**Language** をはじめ、言語学雑誌や人類学雑誌に追悼記事が掲載された。マンチェスター大学のクロフトによると、グリーンバーグは六五才で日本語をまなぼうとして、年齢を考慮しいちどは断念したが、そのおもいをすてきれず、このさいごの著作を執筆中の八五才で、『アイヌ語方言辞典』（岩波書店）の日本語を辞書みずして理解できるほどであったという（Croft 2001 : 824, 2002 : 7）。また、グリーンバーグは「言語学からよりも言語から多くをまなんだ」とよくいていたというが（Croft 2001 : 824, 2002 : 6）、言語学は専門化がすすみ、世界の言語を網羅するような一般化に対しては、その細部にわたる厳密性が問題となって、きびしい批判にさらされるという現実のなかで、世界中の言語分類にこだわりつづけ、いろいろな言語をまなびつづけた。そうした面は多としてまなぶべき点がおおしい。うえて、痛烈な批判をのべておいたが、まなぶべき点がおおしいということも、あわせてのべておきたい。この共同研究会の班長ボビンによる書評が用意されているときく。このボビンの書評もふくめ、グリーンバーグのさいごの著作の書評はまだ出版されておらず、評価がさだまっていない（補注1）。アメリカ先住民語の分類ではかなりの反発をかったが、このユーラシア語族についてはどう評価されるのか。私見によれば、こちらの方がさらに反論がおおいようにおもうが、いかがだろうか。なお、偶然の一致といえいいのか、このグリーンバーグのユーラシア語族はその名称といい、言語の分類といい、岸本のユーラシア語族と類似している。その点だけはひとことのべておきたい。

（4）言語類型論からのアプローチ。言語類型論とは、ほんらい共時的な研究であって、比較歴史言語学とは無縁のものだとかんがえられてきた。ところが、言語類型論とその類型の研究とともに発展した言語の普遍性をみることで、言語の歴史を解明しようといううごきがある。こうした言語類型論的アプローチとして、ここで紹介するのはジョハンナ・ニコルスの研究である。

ニコルスによると、じゅうらいの比較方法ではせいぜい八千年前にさかのぼることができればいいほうで、それ以前をあつかうことができないという（Nichols 1992 : 2）。しかし、比較的安定した構造的特徴をみることによって、もっと時間をさかのぼることができると指摘する。その比較的安定した構造的特徴とはつぎのような特徴である（Nichols 1992 chapter 5, 1995）。**head/dependent marking**、句構造（Structure of phrases）、動詞の一致（Verb agreement）、**Alignment**、選ばれた形態論的範疇または類（Selected morphological categories or classes）、他動性の状態や態と関連する特性（Properties related to voice and the status of transitivity）、地域的とみなしうる特徴：語順や音韻体系の諸特徴（Features presumed to be areal: word order and features of phonological systems）。このうち、**head/dependent marking** はあとで

くわしくのべるとして、いくつか説明をくわえておこう。

まず、句構造とは具体的には前置詞をつかうか、後置詞をつかうか、また所有をどのようにあらわすかといった句の構造をいう。動詞の一致は主語と動詞、目的語と動詞の照応関係をさす。**Alignment** とは自動詞節と他動詞節における名詞項の標識のしかたをいう。具体的には、対格、能格、動作格－状態格、中和などをさす。えらばれた形態論的範疇または類とは、具体的には抱合的／排他的対立、文法性（名詞類）、数詞類別詞、単数／複数の対立の四つをあげている。このうち、抱合的／排他的対立というのは一人称複数において、聞き手をふくむ（抱合的）か、ふくまないか（排他的）による対立をさす。他動性の状態や態と関連する特性とは、動作主をとりさったり、あらたにつけくわえたりする、受動や使役のことをさす。さいごの地域特徴は、具体的には語順とか、声調（トーン）などをさす。

うえであげた構造的特徴のうち、**head/dependent marking** はニコルスの独創的な規準である。主要部標示と従属部標示と訳されて、『言語学大辞典』に説明があるので、その説明を引用しておこう。**Nichols (1986)** によると、主要部と従属部をつぎのようにわかる。（下表は言語学大辞典第6巻 695 頁からの引用）

	主要部 (Head)	従属部 (Dependent)
句レベル	被所有物 被修飾語 付置詞、前／後置詞	所有者 修飾語 付置詞の目的語
節レベル	述語 助動詞	名詞項および付加詞 語彙的動詞、あるいは本動詞
文レベル	主節述語	従属節述語

そして、「主語や目的語の名詞では数や格を標示せず、動詞のみでそれらを標示する場合のように、主要部に標示が偏るタイプを主要部標示型 (**head-marking**) とよぶ。――中略――。逆に、主語や目的語の名詞のみが数や格を標示し、動詞には数や格標示がない場合のように、従属部に標示が偏るタイプを、従属部標示型 (**dependent-marking**) とよぶ」（言語学大辞典 6 : 695 頁）。また、主要部にも、従属部にも標示される場合は二重標示型 (**double-marking**) といい、あるときには主要部に、またあるときには従属部にといったように、標示にかたよりのないタイプを分裂標示型 (**split-marking**) という。この主要部標示型と従属部標示型は歴史的に変化をうけにくく、安定した特徴であるとの主張はみとめられている (**Helmbrecht 2001 : 1431**)。しかし、主要部標示型、従属部標示型、二重標示型、分裂標示型によって、あらたな語族が決定されたわけでもないし、このタイプが歴史的にまったく変化しないわけではない。そこはまだ研究の余地がのこされている。その点には注意する必要がある。

ニコルスはこうした特徴を世界の言語について調査し、比較的变化しにくい安定的な特徴に着眼することによって、言語史の解明をこころみている。しかし、これによって、ニコルスのシナリオ通り、八千年以前の言語状況を解明できたかということ、そこまでにはいたっていない。ただ、これまであまりとりあげられなかった統語論レベルでの類型論的特徴を世界規模でしら

べ、しかも歴史言語学とむすびつけた研究者として、ニコルスの評価はけっしてひくくはない。じゅうらい音韻対応をおもな武器として比較歴史言語学が論じつづけられてきたことをおもうと、画期的なことだといわざるをえない。形態論レベルや統語論レベルの類型論の特徴が歴史言語学の道具となるかどうか。いまのところコンセンサスがあるわけではないが、こんごの研究動向に注目したい。

このジョハンナ・ニコルスの研究を日本語系統論に適用した論文は、管見のおよぶかぎり、寡聞にして知らない。しかし、類型論的立場から、日本語の歴史にせまろうとする意欲的な言語学者がいる。それが松本克己である。一連の研究（松本 1994・1998 a・b・c・2000 a・b）にくわえ、本論文集にも、「日本語の系統—類型地理論的考察—」として、特別に執筆していただいたので、詳細はそちらをごらんいただきたい。これまでの比較方法では、「形態素の対応を背後にもった、音韻の対応と形態の対応とが」重要であった。ところが、この「音韻の対応と形態の対応」という比較方法では、手がとどくのは五—六千年という年代幅であって、その方法では日本語の系統は不明であると、松本は指摘する。そこで、登場するのが「言語類型地理論」的なアプローチである。ここでは、「音韻の対応と形態の対応」よりも、言語の類型論的特徴を重視する。とりあげられている特徴は流音（日本語のラ行音にあたる）のタイプ、形容詞のタイプ（形容詞が用言的か、体言的か）などである。なお、この論文集に、松本論文は掲載されているので、その詳細はここでくりかえさない。

この松本の方法論はこれまでの日本語系統論にはみられなかった方法論である。その方法論を画期的とみるか、比較方法の逸脱とみるか、評価のわかれるところだろう。じゅうらいの比較方法をこえるところみを積極的に紹介してきた筆者は、あたらしいころみとして評価したい。ただし、この方法論によって、日本語の歴史がかんぜんに解明できるとはおもわない。また、松本によって提出された結論について、正直いって、積極的に支持できるだけの知識はもちあわせていない。その結論とは、「日本語の遠い同系語を列島の外部に探すのであれば、その視線は西方ユーラシアではなく、むしろ太平洋の彼方、アメリカ先住民の言語へとむけられなければならない」とある。この松本の結論が一般的にうけいられるまでには、こうした方法論によってみちびかれた結論が考古学的な、あるいは自然人類学的な傍証によって、どこまで支持されるのか。言語学だけでは証明できない部分をふくむだけに、隣接する分野から、いかに関心をもってもらえるかにかかっているようにおもうが、いかがだろうか。

ここでは、ジョハンナ・ニコルスと松本克己の研究を言語類型論的アプローチとして紹介した。ふたつをまとめて紹介したが、本論文集の松本論文にはジョハンナ・ニコルスの研究への言及はいっさいなされていない。また、おたがいが関連するものではないことは注意すべきである。しかし、その考え方は類似している。その背景にあるのは、これらの言語類型論的特徴のいくつかが歴史的に変化しにくいことや、地域的に偏在することである。このことにはだれも異論はない。しかし、それによって、言語の歴史がかんぜんに解明できるのかといわれると、100%の保証はない。類型論的特徴には、地域的にあきらかに偏在し有意義とみなせるものと、地域的な偏在は確認できず有意義でないものがあるのではないか。その場合、有意義なものだけをとりあげると、歴史的な関係を想定することが可能かもしれないが、なにを有意義とみな

し、なにを有意味ではないとみなすのか、そのコンセンサスがえられるような規準をたてる必要がある。また、そのことと重複するが、類型論的特徴のうち、歴史的に共有できる特徴と偶然の一致である特徴をどうみわけなのか。さらに、類型論的特徴がまったくことなる言語が接触したときに、どのような変化がおこるのか、等々、類型論的特徴を議論するときの疑問点をあげだすときりがない。こうした研究はまだまだ端緒についているところである。ただし、これが二一世紀の比較歴史言語学の主流になるかもしれない。そんな予感がする。期待をふくめ、これらの研究動向にも目をくばっていきたい。

以上、じゅうらいの比較方法をこえようとするところを紹介した。これらがコンセンサスをえられるかどうかはこんごの研究による。いまの時点では、いずれも決定打にはかけている。これまでこうした研究がなおざりにされてきたが、じゅうらいの比較方法をこえる時期にきていることはまちがいなさう。なお、言語の遺伝子が発見されたり、言語の進化をめぐる研究がすすんだり、言語の脳科学や幼児の言語習得など、言語発生メカニズムの研究がさかんだ<sup>11</sup>。おおきな視野にたてば、どちらも言語の歴史をあつかっているので、比較歴史言語学とまったく関係ないともみすごすわけにはいかない。ただし現時点では、これらが比較歴史言語学にどのような影響をおよぼすか、まだなんともいえない。そこで、こうした分野の理論はこんかいの紹介では省略した。

1. 1. では、厳密な比較方法の適用によっては日本語の系統はあきらかにはならないこと、あたらしい理論はいろいろとあるが、その理論はコンセンサスがえられるにはいたっていないこと、の二点を指摘した。とくに、類型論的アプローチが日本語の歴史の解明にヒントをあたえてくれるのではないかと期待している。ただ、残念ながら、日本ではあまりいられていない。いずれにせよ、じゅうらいの比較方法は、壁にぶちあたり、ゆきづまっている。そのことはまちがいない。そして、それがおおきな原因となって、日本語系統論がはやらなくなったことはじゅうぶん推測できるのではなからうか。

## 1. 2. 言語データの問題点

1. 1. において、比較方法という一九世紀からつづく方法論を、理論的にこえようとするところを紹介した。しかし、伝統的な比較方法に依拠するにせよ、うえてみたあらたなる方法論を適用するにせよ、もっとも重要なのは言語データである。印欧比較言語学があそこまで確固とした方法論を確立することを可能ならしめたのは、いうまでもなく、サンスクリット語やギリシア語などの古典文献が豊富にあったからにはほかならない。ところが、日本語にしても、わが共同研究会の班長が日本語との親族関係の証明をこころみている朝鮮・韓国語にしても、

<sup>11</sup> とりわけ、言語の進化については、生物学者、脳科学者、心理学者などをまきこんで、議論がさかんである。こうした言語学者以外の自然科学者をまきこんだ学際的研究成果について、2000年以降に出版された単行本や論文集をあげておく。この研究がいまいかに脚光をあびているか。出版物の多さから、よくわかる。酒井 (2002), Pulvermuller (2003), Bichakjian (2002), Corballis (2002), Jackendoff (2002), Allott (2001a,b), de Boer (2001), Aitchison (2000), Christiansen & Kirby (eds) (2003), Briscoe (ed) (2002), Wray (ed) (2002), Cangelosi & Parisi (ed) (2001), Knight & Studdert-Kennedy, Hurford (eds) (2000).

最古の文献は印欧語のそれとは比較にならないほどあたらしい。日本語の文献についていえば、ごぞんじのように、上代日本語とよばれている奈良時代の日本語が文献によって確認されている。うえでなんども引用した服部の著作以降、ピジン・クレオール研究をはじめ、日本語の歴史言語学的研究に関連する理論的な研究成果はずいぶんとあたらしいものが積みかさねられてきたが、この日本語の古代文献についていえば、あいかわらず奈良時代以前にはさかのぼってはいない。ときどき、漢字が書かれた土器などがみつかって、日本に文字がはいつた年代が、これまでにいわれていた時代をさかのぼることがあっても、その断片的な文字によって、当時の日本語の音韻体系がわかるまでにはいたっていない。また、あらたに発見された木簡などにかかれた文字資料の研究もすすんでいるが、これまでの日本語の音韻体系の見直しをせまるような発見は、管見のおよぶかぎりしらない。

では、文献によって、上代日本語の音韻体系や形態・統語構造はどこまでわかっているのだろうか。おなじ文献を使用する以上、とうぜん上代日本語の音韻体系などは、すでにコンセンサスがえられているはずである。また、文献の存在する時代をさかのぼった古代日本語、あるいは日本祖語の音韻体系については、どこまでコンセンサスがえられているのだろうか。その音韻体系の実例を上代日本語、そして文献以前の古代日本語、さらにさかのぼった日本祖語の母音体系をとりあげておこう。

まず、はっきりとしているのは、橋本進吉によって再発見された上代特殊仮名遣いがある。それによると、イ列音、エ列音、オ列音には二種の万葉仮名がえてられており、それぞれを甲類、乙類として区別し、 $i_1, i_2, e_1, e_2, a, o_1, o_2, u$  ( $i_1, e_1, o_1$  は甲類、 $i_2, e_2, o_2$  は乙類をしめす) の八母音がよくしられている。この奈良時代の八母音(厳密に言えば、八母音表記)が出発点であることはまちがいない。ところが、松本克己(1975)がこの八母音は表記上の区別であって、音素をあらわしていないとして、上代五母音説を発表して以来、この上代日本語の母音をめぐる論争がおこる。この松本説に対し、じゅうらいの八母音説による大野晋、それにくわえて、この松本説のうち、オ列の甲類、乙類を相補分布による異音とする点をしりぞけ、音素とみなす服部四郎の六母音説がいきりみだれ、はげしい論争がくりひろげられた。しかし、はげしい論争のわりには、今日コンセンサスがえられているわけではない。

文献時代をさかのぼった古代日本語、あるいは日本祖語の母音になると、さらに複雑である。本論文集の日野論文には、大野晋の四母音説、セラフィムの十母音説、そして服部の六母音説が紹介されている。それ以外にも、うえにあげた松本は上代日本語五母音説だけではなく、それ以前の古代日本語についても言及している。結論だけのべると、松本の古代日本語の母音体系は、数からいえば大野晋と同様の四母音説である。ただし、ここでは母音の音価や母音体系にはふれない。また、その古代日本語、あるいは日本祖語の母音が奈良時代のどの母音と対応するのか、といった言語学的にはもっとも重要な点について、ここでは紹介しない。ここでは、大野の四母音説と松本のそれは本質的な部分でことなることだけを紹介しておく。詳細は松本(1995)を参照せよ。

筆者がここで強調したいのは、コンセンサスがえられていないという点である。つまり、日本語がどの言語と同系かという問題をかたるまえに、日本語のもっともふるい時代の音韻体

系について、コンセンサスがえられていない。ここでは母音体系を例にあげて、コンセンサスがえられていないという事実を確認しておきたかったのである。正直いって、コンセンサスがえられるように研究をすすめていかないと、とても日本語の系統があきらかになるともおもえない。こうした日本語系統論の入口でのコンセンサスのなさも、日本語系統論が衰退していった原因のひとつのようにおもわれるが、どうだろうか。なお、本論文集にも、なんらかのかたちで古代日本語（あるいは日本祖語）の母音にふれている論文（日野、小林、エリクソン、ラッセル）がおおいので、古代日本語の母音研究の詳細はそちらをごらんください。

筆者はここでコンセンサスにこだわった。どこまでがコンセンサスがえられた「事実」と認定されていて、どこからがそれぞれの研究者による解釈なのか。あるいは、どこからが解釈をとおりこした仮説なのか。それらがはっきりとしていないと、砂上の楼閣になりかねない。共通した基礎土台をもって、それぞれの建築技術をきそわないと、土台がいつくずれるのかわからない状況では、日本語系統論はおぼつかない。基礎データの共有化からはじめないと、日本語系統論を忌避する研究者たちの関心をよびにくいのではなからうか。共通の土台を築くためには、国語学と言語学の共同研究が重要な役割をになうようにおもうが、いかがであろうか。

日本語系統論というと、ほとんどの場合、「はじめに〇〇語との系統ありき」である。したがって、データはあとからついてくることがおおい。そうすると、対応語をでっちあげるために、《蛸》を意味する単語と《八》を意味する単語をくらべてみたり、日本にはいつてくるのがおそかった《箸》などを対応語としてかかげたり、方言辞典のなかから、だれも聞いたことのないような語例をひきだしてきたり、都合のよいデータをはめこんで、対応語をふやそうとするケースがあとをたたない。日本語系統論で注目をあびたいとか、ひともうけしようとか、学問以外の動機がある場合はともかく、比較言語学的に同系を証明したいのであれば、データに対してはなんでもひきあてるのではなく、厳密に、コンセンサスのえられたデータを使用する。そんなストイックな態度が必要だ。基礎データの共有化をはかること、そして疑問がでやすい対応語をむやみにあげないこと、それが日本語系統論の健全化には急務のような気がする。

理論はつぎつぎとうまれてはきえる。そして、普遍的な理論は定理公式としてのこっていく。これからも、そのくりかえしだろう。しかし、データについていえば、あらたな考古学的発見によって、歴史をぬりかえるような言語資料が出土するかもしれない。そのぎやくに、あらたな発見がまったくないこともじゅうぶんありうる。言語の新資料発見については、まったく予見できない。だからこそ、これまでのデータを研究者が共有し、そこから出発することがだいじである。いまやコンピューター時代である。電子化されたデータがインターネット上で公開されている。本論文集のなかには、小林論文のように、そうしたデータを電子処理したものを利用した論文もある。環境的な異音なのかどうかなどは、コンピューターですぐに検索できるようになった。ただし、ここで注意しなければならないことがある。電子データを処理することは、コンピューターによって、まちがいがなく、はやくなったが、電子データじしんに問題がある。その電子データがすでにひとつの解釈であるからだ。電子データは、まだはじまったばかりである。こうした問題はこんご整理されていくのではないか。そう期待している。電子データ化への期待を表明し、この1. 2. をおえることにする。

## 2. 言語学における学問外要因：比較歴史言語学をとりまく環境

ここでは、言語学における日本語系統論の位置づけ、あるいは日本語系統論をふくむ比較歴史言語学の位置づけをのべてみたい。言語学をまなぶことは日本語系統論を探究することである。そう断言してもけっしてまちがいはない。そんな戦後の一時期があったことは、すでに序でのべた。そうした一時期には、日本語系統論の探究のために、当時の東京大学言語学科教授であった服部四郎は、学生たちに、それぞれ専門とする言語をあるていどわりふつたらしい。ある言語をすすめられた学生がべつの言語のコースを受講しようとして阻止されたという話もきく。服部が日本語系統論統括胴元としてはたした役割はおおきかった。その服部が「日本語の系統は依然として未詳」だといって、日本語系統論を後世に託した。ところが、時代はすっかりかわってしまった。なんといっても、いまの時代では、指導教官がこうした指導をおこなうとアカデミック・ハラスメントといわれかねない。こうした指導体制がゆるされなくなっただけではない。言語学のトレンドもおおきく変化したのである。

まず、なによりもおおきかったのは、チョムスキーによる生成文法をはじめとする、統語論を基本とする言語理論の登場である。ごぞんじのように、二〇世紀になってから、言語学は通時的研究一辺倒から共時的研究へと裾野をひろげてきたが、この言語理論の登場によって、共時的研究が通時的研究を駆逐してしまった。そんな印象すらあたえるほど、比較歴史言語学は言語学の研究分野の片隅においやられてしまったのである。チョムスキーが提案する普遍文法は、どんな言語からでも到達できるという仮定から出発する。また母語話者の言語能力を重視するために、母語である日本語と理論をまなぶための英語だけで言語学をカバーできることになる。そのことは、些末的なことのようにみえるが、言語理論へ関心がうつった要因のひとつであるようにおもう。印欧比較言語学をまなぶためには、ギリシア語、ラテン語、サンスクリット語といった古典語をまなび、論文をよむためには英語、独語、仏語、露語などをマスターしなければならない。かつて、言語学が博言学とよばれていたころは、博言学科の学生に対し、これぐらいの言語の修得が要求されたという。残念ながら、われわれの世代において、それができるのは言語学をまなぶ人のうちごく少数である。また、日本語系統論をまなぶためには、アイヌ語や朝鮮語からはじまって、モンゴル語、トルコ語などのアルタイ語族、ハンガリー語やフィンランド語などのウラル語族、そして南のほうではオーストロネシア（南島）語族に、シナ・チベット語族など、日本語と系統関係が想定しうる言語について、かなりの知識を必要とする。それよりも、日本語の文章が文法的に正しいかどうか、ネイティブ・チェックをするほうがずっとかんたんだ。比較歴史言語学離れが急速にすすんだのは、生成文法に駆逐されたという側面だけではない。生成文法のほうが、多言語を学習する必要がなく、よりアプローチしやすかった点のみすごしてはならない。

また、比較歴史言語学、とりわけ系統論は統語論にあまり関心をよせてこなかった。そのことも衰退をまねいた原因だ。いみじくも、「形態素の対応を背後にもった、音韻の対応と形態の対応とが、言語間の親族関係の決定的証拠となる」と服部が指摘するように、同系の証明には統語論を重視しない。そのために、浩瀚な辞書があれば、あるていど同系かどうかの証明は可



能である。じっさい、大野晋がタミル語をえらんだのには、タミル・レキシコンという浩瀚な辞書の存在がある。そこに、アームチェアー比較歴史言語学者という批判がうまれる。たしかに、統語論をやるためには、その言語にかなり精通し、またネイティブ・スピーカーの協力が必要不可欠である。それにくらべると、比較歴史言語学はその言語をはなす必要もないし、統語論的な知識がなくても問題ない。言語学の一大転換点であった音韻論・形態論から統語論へというながれに、比較歴史言語学はとりのこされてしまったといえるだろう。

ただし、うえの理論のところでもみたように、グリーンバーグやニコルスといった歴史言語学のあたらしいところももうまれている。世界的にいえば、比較歴史言語学がけってして衰退してしまったわけではない。アメリカでは、生成文法がいきおいをもっていた六〇年代から七〇年代にかけての一時期よりもいまのほうが、むしろ歴史言語学への関心がたかくなっているという。また、比較歴史言語学も、近年では統語論に関心をよせ、とりわけ九〇年代以降の言語学トピックの一つである文法化(Grammaticalization)と比較言語学をあつかった論文集(Gildea 2000)もある。また、すでに紹介したニコルスのあげる類型論の特徴は、統語論にもとづくものがおおい。ただ、こうした研究が日本ではあまり紹介されていない。そこにも問題がある。ムンダ語研究のノーマン・ザイデによると、バンクーバーでひらかれた世界歴史言語学会に、日本人がほとんど参加していなかったという。ザイデの所属するシカゴ大学の言語学科には、あふれるほどの日本人留学生がいるのに、どうして日本人は歴史言語学に関心をしめさないのか。そう質問されたときに、返答に窮した。日本語系統論をうんぬんするまえに、比較歴史言語学への関心をもってもらうために、あたらしい動向を紹介するような機会が必要なかもしれない。

ここまで、比較歴史言語学の言語学における位置づけについてみてきた。日本において、比較歴史言語学を専門とする言語学者がへっていることはたしかである。しかし、それと日本語系統論の衰退とはかならずしもパラレルではない。むしろ、日本語系統論が比較歴史言語学の動向をかんぜんは無視して、暴走していることが日本語系統論離れをまねいている。たとえば、大野晋の『新版日本語の起源』を批判し(家本・児玉・山下・長田 1995)、大野晋の反論(大野 1996)に対しても、再反論(長田 1998)をおこなったことがある。しかし、その議論が生産的におこなわれたとはいいいがたい。とくに、長田(1998)では、比較歴史言語学のあたらしい成果を紹介したのだが、その点について、大野はかんぜんは無視し、いっさいふれていない。また、大野晋がおかした重大な犯罪的行為として、ズベレビルやエメノーの英語をわざと(?)誤訳して、自分の都合のいいように解釈していることも指摘したが、これらについての返答はいっさいない。最新作によると、かつての論敵村山七郎までが大野晋の説に納得していたがごとく記述しているが(大野 2002: 46)、ここまでやると、老獺などといってられない。正直、あいた口がふさがらない。村山七郎はさぞ草葉の陰でくやしのおもいをしているのではないだろうか。筆者がかつて大野流比較言語学と批判したように(長田 1998: 396)、大野晋は伝統的な比較言語学による比較方法の適用もせず、かといって比較歴史言語学の最新動向にはまったく関心をよせない。これでは、日本語系統論は比較歴史言語学の一部ではなく、言語学とは関連しない独立した分野といわざるをえない。しかも、それは亀井孝(1995: 11)が指摘す

るように、「日本語系統論狂の日本語系統論教」とでもよぶべき信仰の部類に属す。じじつ、大野晋の学説には誤謬がない。これまでも、自説をなんとか変更してきたが、その理由は開示されていないし、自説のまちがいは過去のものであってもみとめない。ここまできると、学説とか、仮説とか、いえない。まさしく信仰そのものである。日本語系統論は言語学から逸脱し、信仰の世界へと飛躍してしまった。そのために、言語学徒たちは日本語系統論を忌避するのかもしれない。

いっぽう、日本語系統論は言語学の問題ではなく、ナショナリズムの問題である。そうかんがえる人がけっこういる。そのけっか、言語学者は日本語系統論からますます遠ざかり、言語学以外の分野からは、オリエンタリズムとしての言語学、あるいは政治的な言語学として糾弾される。そんな状況が九〇年代からつづいているようにおもう。日本語系統論が言語学内部での関心がひくくなればなるほど、言語学外部から、日本語系統論や比較言語学の政治性が批判される。言語学内部での忌避と言語学外部の批判は、いわば表裏一体の関係といえるだろう。そこで、言語学内要因はこれでおえて、言語学外要因にうつることにしよう。

### 3. 言語学外要因：日本語系統論や比較言語学への懷疑

言語学外部には、日本語系統論、およびその背後にあるとされる言語学に対する批判がある。冒頭から、すこしながくなるが、その典型的な言語学批判を紹介したい。

現在の学界では、この学説（＝「日韓両語同系論」と、鈴木はよんでいる：長田注）はしばしば、政治目的が研究の方向を誤らせた教訓的な例として倫理的な口調で語られている。しかし、学説や研究者個人に対する倫理的な反省は逆に、「日鮮同祖論」を好意的に受け入れ、暗黙の期待を寄せた当時の知的土壌、さらに科学の方法そのものへの批判を見失わせることになる。・・・(中略)・・・ この一見中立に見える科学的方法が、あくまで西欧近代の「視線」を基盤としており、決して客観的なものとはいえないことは明らかである。そもそも言語学や民族学自体が、西欧社会においてオリエンタリズムの言説形成に預かった学問であり、これらが近代日本にもたらしたものは、優越する西洋と劣等の東洋との間に根深い区別を設定する西欧近代の「視線」そのもの、つまり観察の主体と対象との隠微な力関係にほかならなかったからである。これら諸学問は、通常、科学的中立性という神話を以て、その力関係を巧妙に隠しているが、科学的方法それ自体を検証するという作業は、その方法や学説が単に植民地主義を合理化したということだけではなく、むしろそれに先んじて「知」の領域で支配－被支配の権力関係を編成していたことを明らかにする筈である。(鈴木 1993 : 211)

これは金沢庄三郎によって提唱された「日鮮同祖論」をめぐるの批判である。この著者によると、金沢個人を批判するだけでは十分ではなく、言語学は西欧社会においてオリエンタリズムの言説形成にあずかった学問であって、科学的中立性はなく、西洋中心主義的な方法、そ

のものを断罪すべきであるという。

じつは、筆者じしん、現在の言語学界に批判もあれば、不満もある。言語学会の発表といえ、**「〇〇語における△△の××について」**と重箱のすみをつつたような細分化されたものばかりだ。また、西洋、とりわけアメリカの言語理論の動向をおいかけるだけで、言語よりも言語学の最新理論に関心をもった、亀井孝（1971：195、1995：175）のいうところの「言語学学」になってしまっている等々、批判すべき点はいくらでもある。ところが、うへの鈴木による批判はまったく的はずれだ。まず、比較言語学があきらかにしたのは、「優越する西洋と劣等の東洋との間の根深い区別を設定」したのではない。西洋の古典、ラテン語とギリシア語が、インド（インドは西洋ではなく東洋である）の古典、サンスクリット語と起源をおなじくすることをあきらかにしたのだ。そして、その方法は「科学的中立性という神話を以て」おこなわれたのではなく、じつのところ、西欧人がその方法で比較しても、日本人がその方法で比較しても、やはり、ラテン語とギリシア語はサンスクリット語と同系なのである。たとえ、言語学が「支配－被支配の権力関係を編成する」ゆるしがたき学問であるからという理由によって禁止されたとしても、ラテン語とギリシア語がサンスクリット語と系統をおなじくするという事実はかわらないのである。それに比べ、日本語と朝鮮・韓国語の系統関係はまだ証明されていない。金沢の言語学的な証明が不十分な部分を指摘すれば、おのずと、その政治性がうきあがる。そんな批判のほうが正統派ではなかろうか。

それに一番いただけないのは、言語学が西洋中心主義的だといって批判するさいに、なぜ西洋で流行のオリエンタリズム批判を援用するのか。西洋近代の「視線」を問題とするのも、また西洋の「視線」にほかならない。アメリカのコロンビア大学教授サイドがいうところの「オリエンタリズム」は、西洋とインドという「存在論的区別」にはあてはまらないという、インド人たちの批判があることもしるべきである（長田 2002 参照）。また、それとはべつに、言語学がオリエンタリズムの言説に関与しようがしまいが、かつての日本の朝鮮半島支配が暴力的であったことにはかわらない。それにもかかわらず、「日鮮同祖論」をオリエンタリズム批判によって糾弾するのはなぜか。そのことのおろかさには気がつかないようでは、西洋中心主義的な言語学批判をおこなう資格はない。「オリエンタリズム批判」の尻馬にのるよりは、この論文集のなかで、西洋の屈折語にもとづく言語理論から脱却し、孤立語から出発する類型論を提唱する峰岸論文のほうが、言語学の西洋中心主義的な側面（この場合は西洋語中心主義的）をあきらかにしているのではないだろうか。

言語学批判をするならば、徹底的にすべきである。そのためには、言語学をちゃんと理解していなければ、とんでもない生半可な理解を露呈するハメにおちいる。つぎのような一節をよんだときには、啞然とするより、ご愁傷様とおもわず口をついてでるほど、こんな文章がおおやけになることの気の毒さがさきにたつた。

もとより、よく知られているように一九世紀の比較言語学の方法とは、孤立語－膠着語－屈折語の三つの語族に言語を分類し、「祖語」と称される語源を同じくする同族語が音韻の対応を含めて「比較」の研究対象として取り上げられ、孤立語である中国語は印欧諸語

の類縁性の対象外とされた言語であった。(長 1993 : 233)

念のために、なにがまちがいかわか、指摘しておこう。まず、孤立語—膠着語—屈折語は語族ではなく、言語の類型論的特徴による分類である(本論文集の峰岸論文や児玉論文を参照せよ)。これらは比較言語学の方法とはちよくせつ関係がない。「語族」とは印欧語族など、系統をおなじくする言語グループをさす。「語源」は単語の起源を意味し、言語の起源をささない。「同族語」とは一般的には「同族目的語」(英語の‘sing a song’のように動詞とおなじ意味の目的語をいう)のような単語をさし、系統をおなじくする言語をささない。「語源を同じくする同族語」とは、まさしく‘sing a song’のような例をさすことになって、ここでなにがいいのかははっきりしない。なお、「語源を同じく」する場合には、借用語のケースもふくまれ、比較言語学において同系を証明するさいには、借用語は排除される。「祖語」は単一の言語とみなされ、系統をおなじくする言語すべてをささない、等々。ここの概念や用語は、いずれも言語学の初歩の初歩である。こんなまちがいは学部学生すらしないだろう。いちども言語学概論の講義をきいたことがないとかおもえない。それを「よく知られているように」とかき、しかも単行本(長 1998 : 232)でも若干表現はかわっていても、うえて指摘したような基本的な部分は訂正がなされていない。こんな言語学理解による言語学批判は無益をとおりこして有害である。

言語学外部からの批判に対して、そのあらさがしばかりをするのが筆者の目的ではない。言語学外部からの言語学批判が、いわば西洋の尻馬にのった表層的な批判とならないために、実証的なよりよい批判をしてもらうことが筆者の目的である。そこで、明治の国語制定にかかわり、つねに批判の対象とされてきた上田万年のことをとりあげ、言語学外部からの上田万年批判に対する筆者なりの応援歌としたい。

上田万年とはどういう人なのか。言語学の講義で上田万年についてならうことはほとんどない。そこでまず、亀井孝執筆の『平凡社大百科事典』の上田万年の項目から引用しておこう。

国語学者。現代の国語学の生みの親というべき人である。江戸に生まれ、1888年、帝国大学文科大学を卒業。当時、大学の講師であったB.H.チェンバレンの愛弟子で、この師から言語学の手ほどきをうけた。90年さらに言語学を深く研究するため渡欧し、当時言語学の本場であったドイツで、ブルークマンやオストホフらの一流学者のもとに学んだ。94年帰国して、帝国大学教授となり、博言学(当時、言語学をこう呼んだ)の講座をうけもった。98年文科大学内に初めて国語学研究室を設けた。翌年、文学博士。1905年以後定年まで、国語学教授。その間、文部省専門学務長、文科大学長、神宮皇學館、臨時国語調査会会長を兼ねた。明治における日本の近代的な学問の啓蒙時代を築いた偉大な人物の一人として忘れることのできない学者である。自身の学問的業績は多くないが、よく学問を鼓吹し、後進を育てた功ははなはだ大きい。

では、なぜここで上田万年をとりあげるのか。それはイ(1996)や安田(1997)、それにうえてあげた長(1998)、そしてそれらに依拠したという小森(2000)などが、こぞって上田万

年をとりあげ、「国語」という思想の創設者として糾弾し、また博言学（＝言語学）講座の初代教授であった上田が創出した「国語」という思想をささえたと言語学を批判しているからである<sup>12</sup>。ただし、言語学出身者のイとほかの人で言語学に対するスタンスはちがうのだが、それはここでは問題としない。筆者が疑問におもうのは、つぎのことである。はたして上田万年だけを近代の「国語」という思想の創設者とかんがえればよいのだろうか。また、上田が「国語」という思想を創設するにあたって、ヨーロッパでの留学体験にもとづく、上田独自のものとみなしているが、上田の同時代人で、上田の思想に影響をあたえた人物はかんがえられないのだろうか。

伊沢修二はどうだろう。伊沢は台湾との関連でろんじられることがあっても、文部省役人時代や伊沢が中心となって設立した「国家教育社」のことは、これまでふれられてこなかった。上田の留学前（1889年）の講演論文「言語上の変化を論じて国語教授の事に及ぶ」（上田 1903：133-166）は伊沢とふかくかかわる「大日本教育会」での演説である。伊沢にたいする上田の「よいしょ」がみられる。このあと上田はドイツに留学する。いっぽう、伊沢は森有礼文部大臣の暗殺によって、後ろ盾をうしない、文部省を非職となる。そして伊沢が設立したのが「国家教育社」である。伊沢が起草した「国家教育社設立ノ要旨」と上田の「国語と国家と」での主張は酷似している。たとえば、国家を「土地、人民、社会、経済ノ四要素ニ由リ」と規定するところからはじまるが（上沼 1962：162）、いっぽう、上田は土地、人種、結合一致、法律の四つの要素をあげている。これについて、イ（1996：119）は「留学時に親しんだプロイセンの『国家学』の教義からひきだしたにちがいない」とのべているが、実証的にそう断定できるものはなにも提示されていない。この「国家教育社設立ノ要旨」をはじめ、同様の分析が日本にないことを確認することから、実証的にかたられるべきではないのか。この伊沢修二以外にも検討すべき人はいる。1902年に設置された国語調査委員会には、委員長加藤弘之をはじめ、前島密、大槻文彦、井上哲次郎、沢柳政太郎、嘉納治五郎などが、委員として参加している。かれらと上田万年の関係はどうだったのか、こうした人々についてもかたられるべきである。

また、上田万年のガーベレンツからの影響がよくかたられる（田中克彦 1989・1997）。それをものがたるエピソードとして、ガーベレンツは「ヒフミの倍加説」を上田万年からならった可能性があるとして、田中克彦は推測しているが、はたして本当なのだろうか<sup>13</sup>。こちらについては、金子亨が筆者の疑問にこたえてくれている。金子はライプツィヒ大学において客員教授として講義をした体験から、ベルリン大学の文書館などで、上田のドイツ留学をあとづける調査をおこない、それにもとづいて、論文（金子 2001）を執筆している。そのなかで、金子はこうのべている。

<sup>12</sup> うえであげた本以外にも、鈴木（1994）や清水（1996）など、上田万年をとりあげた論文もおおい。

<sup>13</sup> ここで、この説をとりあげるのはイ（1996：106）も、長（1998：227）も、この田中克彦の説を紹介しているからである。

上田自身がガベレンツを「もと私の師匠でありました」（「言語学者としての新井白石」1895）と呼んでいるのであるから、ベルリン大学で彼がガベレンツに学んだことは間違いない。もっともイ・ヨンスクが田中克彦（田中克彦「ヒフミの倍加説」『国家語を越えて』1989）を援用して書いているようなこと（イ 1996 : 106）、つまりガベレンツの『言語学』中の日本語の数詞の記述が上田の教示によるというような実質的な研究交流が成り立つ関係ではなかったのではなかろうか。なぜなら一方では上田の学生としての身分と多分まだ未熟であったドイツ語運用能力、他方ではガベレンツの本来のひろい学識、とりわけロドリゲスなどの日本語に関する西洋の諸文献への深い造詣などから判断して、ガベレンツは「ヒフミ」の話ぐらひは知っていたであろうし、上田とガベレンツとの関係は基本的に若い留学生と術学の教授とのそれであったと考えられるからである。ただのインフォーマントとしてならばともかく、上田からガベレンツへ学問的情報が直に伝わるという状況にはなかったのではないだろうか。（金子 2001 : 6）

筆者じしんも、田中克彦の甘美な空想がまちがいであることを、つぎのような井上哲次郎の回想から文献的に検証できることを確認している。井上はガーベレンツとのなれそめを説明し親しかったことを紹介したあと、こうのべている。

このガベレンツの父も東洋の語学に通じて居つた人である。父のガベレンツは支那にも来て居つたことがあるので、始めて満州語の文典を仏蘭西語で書いた人である。その満州語の文典には日本語に関係有ることが一つ書いてある。それは満州の数には力を入れて倍数を云ひ表すのがあるが、日本の数字にもそれがある。三つを力説して六つといひ、四つを力説して八つと云ふ。これと同じことが満州語にもあると父のガベレンツが満州文典に云つてゐる。これは日本にも関係の有ることであるから、ついでに話して置くのである。（井上 1943 : 306-7）

ガーベレンツ父の満州語文典が手元にはないので確認していないが、井上哲次郎の回想をよむかぎり、ガーベレンツ子は上田から「ヒフミ」の倍加説をならったのではなく、ガーベレンツ父からならったとみてまちがいなからう。なお、この「ヒフミの倍加説」は、すでに 1879 年に刊行された論文で、アストンがつぎのように指摘している。

“Attention has been drawn to the fact that *mi* ‘three,’ and *mu* ‘six,’ differ only in the vowels, the consonants being the same, and that *yo* ‘four’ and *ya* ‘eight,’ are related in the same way. When it is remembered that in Japanese it is the same letter which is *f* before *u* and *h* before other vowels, it will be seen that a similar relation exists between *hito* ‘one,’ and *futa* ‘two.’” Aston (1879 : 357)

また、チェンバレンの *A Handbook of Colloquial Japanese* (1889) にも、同様の説明が掲

載されている (p.99)。したがって、この「ヒフミの倍加説」は、1890年に渡欧した上田万年ごとき留学生からならわなくとも、日本語に関心のある西洋の言語学者にとって、よくしられた言語現象であったことは想像にかたくない。

ここまでよまれた読者から、こう質問をうけるかもしれない。「これまでの上田万年像にいちやもんをつけるおまえは、どのように上田をみているのか」と。筆者がこれから提示する上田万年像は、じゅうらいのイメージとはずいぶんことなる。それは、上田が言語学としてはアマチュアではないか、ということである。じつは、「言語学者には、プロの言語学者とアマの言語学者がいて、その区別ははっきりしている」と、筆者の友人（もちろん言語学者である）がのべていて、その至言を筆者なりに上田万年にあてはめたものである。それは、これを「プロ中のプロ」服部四郎とくらべると、よくわかる。服部四郎は「厳密に (rigidly)、徹底的に (exhaustively)」と口すっぱく弟子たちにいつづけた。しかも、それをみずから実践した。亀井孝 (1992: 123) が「翻案言語学」と服部の言語学を揶揄することがあったが、その亀井も服部の厳密な研究には脱帽せざるをえなかったはずだ。ところが、上田万年はというと、この厳密さがどうも欠落している。

その例をあげる。明治二八 (1895) 年、上田は『帝国文学』を舞台に、フローレンツと論争をしている (上田 1895 a・b・d、フローレンツ 1895 a・b)。和歌のドイツ語訳をめぐるものだが、上田のドイツ語のまちがいを指摘したフローレンツに、上田はじぶんの恩師にもかかわらず、「フローレンツ先生の比較考上には、徹頭徹尾笑止且怪訝に堪へざる事実充満し」 (1895 b: 58) と全面対決し、「予は先生を愧死せしむべき例証頗多し。さはれ先生よ、驚きたまひそ、予は左程の戸迷ひを為す者にはあらず」 (1895 d: 74) と恫喝し罵詈雑言をあびせている。とても、厳密な議論とはほどとおい。まるでヤクザのせりふだ。また、おなじ『帝国文学』に掲載された上田万年 (1895 c) 「本居春庭」にも、おおくのあやまりがあり、本居春庭の曾孫、本居清造 (1895: 80) が「文中一二の謬れるもの漏れたる事のなきに非れば此に是を正し補はむとす」として訂正している。一番ひどいのは、『言語学雑誌』の創刊号への「祝辞」である。冒頭で「西周先生が自ら博言学の訳名を作り」とはじめたのである。これに対し、『言語学雑誌』第四号で「博士 (=加藤弘之: 長田注) はフキロロジーを博言学と訳し (記者いふ、本誌に会て西周氏の訳語としたのは誤謬である)」と弟子 (八杉貞利の『新居雜記』から八杉によることがわかる) に指摘されるありさまである。もっともそのおかげで、『国語のため第二』に再録された「祝辞」では「加藤弘之」に訂正されている。

こうした厳密さという問題だけではなく、実践という点でも、服部四郎と上田万年ではおおきくことなる。山本正秀 (1965: 633-4) によると、上田は言文一致の実践者として評価されているが、助詞の「は」を「わ」とかくことも、「を」を「お」とかくこともやっておらず、厳密な意味では、上田万年は「言文一致」の実践をほとんどやらなかった。ただし、上田の弟子、保科孝一はこれを実践している。また、「標準語」制定のために、「標準語」を制定することが近代国家にいかに必要か。上田は政治家顔まけの演説をぶつことはよくあった。しかし、「標準語」教育に必要な不可欠な『標準国語文法』を、けっして執筆することはなかった。ほとんど手をよごさなかったのである。いっぽう、服部は日本語ローマ字正書法を確立し、とくに

「つ」を cu と表記することを特徴とする「新日本式」ローマ字綴りとして提案した。そのさい、じぶんの研究室でだす『東洋語研究』はこのローマ字表記で出版している。このローマ字表記はアメリカ流言語学をまなんだ人ならだれでも理解できる。さらに、服部はその解説のために、『音韻論と正書法』と題する本も執筆したのである。しかし、保科孝一（1937：118）がいうところの「学者的政治家であり、また政治家の学者であった」上田万年とはちがひ、服部はまったく政治とは無縁で、政治的手腕を發揮することはなかった。そのために、「新日本式」は採用されなかった。かんたんに「アマ」の上田と「プロ」の服部を対比させた。後述する、イ・ヨンスクが提示する「保守派」と「改革派」の対立よりは、この対比のほうが実証的といえるのではないだろうか。

ところで、上田万年の「学者的政治家であり、また政治家の学者」はいつごろからはじまったのか。それをうらづける資料がある。それが八杉貞利の日記『新居雜記』である。八杉が博言学科に入学したのは明治三〇（1897）年のことだ。上田が帰朝して三年目のことである。刊行された日記は明治三一年から三二年にかけての部分である。八杉が受講した講義のことがことまかに記載されており、この当時の博言学科の実態をかたる一級の資料である。それによると、上田万年の「休校」（八杉の日記には休講ではなく休校とある）がじつにおおい。また、八杉が博言学をまなぶために、どんな本をよんだか、克明に記載されている。まずホイットニーをよんだあと、マックス＝ミュラーをよみ、そしてセイスにすすんでいる。そして、そのあとにガーベレンツの『言語学』にとりかかっている。これらは博言学科教授上田万年の授業でとりあげられる順番であったものと推測できる。明治三一（1898）年には言語学会が創設されている。その創設にあたっては、よくいわれるように上田万年が尽力したのではない。すでに学士になっていた藤岡勝二や金沢庄三郎、そして在校生の新村出や八杉貞利たちが、この言語学会のためにいかに奔走したか。その顛末始終を、この日記がよくものがたっている。そして、上田万年が文部省の役人を兼務することが決定した、明治三一年一月二四日の日記にはこうある。

午前九時出校 上田先生ニ面会 先生ガ専門学務局長ニ榮転之確報ヲキク 一ハ先生ノタ  
メニ之ヲ喜ビ一ハ学問ノタメニ之ヲ悲ム 一喜一憂 言之外也

一喜一憂した六日後の一一月三〇日には、上田万年への失望感を表明している。

夕刻新村氏来訪 相共テ上田先生ヲ訪フ 「ガベレンツ」ヲヨム時間ヲ高楠氏ガモツトイ  
フ事ニヨリ大ニ論ゼンガタメ也 不在 失望 一時間余待チタレドモ帰ラレズ

授業はいつも「休校」。ガーベレンツの講読は、高楠順次郎にまかせる。ご本人は博言学科の学生のことをほったらかして、出世をめざし文部省の専門学務局長に。これでは失望してあたりまえである。明治三二（1899）年から、八杉の日記では、上田先生が上田氏にかわっている。上田万年をたたくにせよ、もちあげるにせよ、上田万年は西洋から言語学を導入した人と



いった評価はかわらない。しかし、この八杉の日記をよむかぎりにおいては、あまり言語学をおしえようという熱心さはつたわってこない。文部省内での出世にはおおいに興味をいだいていたようにみえる。このことから、上田万年は言語学のアマであるという、筆者の評価をうらづけているようにさえみえるのだが、いかがだろうか。

さらに、これに関連して、もうひとつのべておきたい。日本の言語学史をかたるときに、つぎの質問は重要だ。どんなテキストを使用して、言語学をまなんだのか。堀川 (1992) によると、日本ではじめて言語学をおしえたチェンバレンは、ホイットニー (W. D. Whitney 1875 *The life and growth of language*) とフリードリッヒ・ミュラー (Friedrich Müller 1875 *Grundriss der Sprachwissenschaft 1: Einleitung in die Sprachwissenschaft*) を使用したという。このフリードリッヒ・ミュラーについて、堀川の注では Friedrich Max Müller となっている。また、新村出筆録、柴田武校訂『上田万年 言語学』の索引もフリードリッヒ・ミュラーとフリードリッヒ・マックス＝ミュラーは同一人物として登場する。しかし、フリードリッヒ・ミュラー (1834-1898) とフリードリッヒ・マックス＝ミュラー (1823-1900) はまったくの別人物である。筆者じしんも Koerner (1995) をよむまで気がつかなかった。ただ、拙著 (長田 2002) の執筆時に、マックス＝ミュラーについてしらべたのだが、この *Grundriss* の大著がマックス＝ミュラーの詳細な著作目録にはないため、おかしいなあとはかんじていた。なお、Koerner (1995: 159) によると、フリードリッヒ・ミュラーは “race and language were no longer kept apart as independent aspects of humanity” とみなしたとある。このことと上田のいくつかの発言に関連があるようにおもうが、筆者はこの *Grundriss* を未見のため、はっきりと影響をうけたかどうか、うかつなことはいえない。この Friedrich Müller の *Grundriss der Sprachwissenschaft* は四巻七分冊からなる大著である (補注2)。チェンバレンが使用し、上田万年の言語学講義ノートにも参考書のなかに入れてある。上田のホイットニーやガーベレンツからの影響ばかりがかたられるが、このフリードリッヒ・ミュラーや明治三一 (1898) 年に上田万年・金沢庄三郎共訳『言語学』として訳されるセイスの著作などにもあたってから、上田万年の言語学形成をかたるべきであろう。なお、この金沢庄三郎との共訳をはじめ、『日本外来語辞典』(高楠順次郎との共著) や『大日本国語辞典』(松井簡次郎との共著) などの辞典、そして『近松語彙』(樋口慶千代との共著) のインデックスなど、上田万年は共著者として、訳や辞書編纂の仕事を、じっさいにはなにもやっていない。ただ名前をかしただけである。こうした名前貸しを上田万年がはじめたものだと断定できないが、上田が辞典や訳書の名前貸しの伝統をつくったことはまちがいない。それを上田の人徳とみなすのか。それとも恥部とみなすのか。評価のわかれるところだ。

この第三章では、言語学外部からの言語学批判に対する筆者なりの応援歌だとのべた。なぜ応援歌なのか。それは日本語系統論にせよ、言語学批判にせよ、言語学内外をとわず共通の問題点があるからだ。それは、「はじめに系統論や理論、あるいは構図ありき」ということである。そのために、系統論や理論、あるいは構図を証明せんがために、その構図や系統論に都合のわるい事例を隠蔽する、あるいは言及しないでおく傾向がある。言語学の外部にしようが内部にしようが、そういった傾向にはどめをかける。そのための応援歌なのである。そうした理

論や構図を優先しないためには、まずデータから出発すべきである。そうかんがえて、筆者なりの上田万年についてのデータを提示した。もっとはっきりいえば、上田万年を批判するのに、なにも「国語」という思想を創出した人とみなす必要はない。批判する要素はいくらでもあるように筆者にはみえるが、どうだろうか。

「はじめに系統論や理論、あるいは構図ありき」がなにをさしているのか。具体的な例をあげておこう。たとえば、系統論についていえば、大野晋は「日本語＝タミル語起源説」にとって都合のいいデータはなんでもとりあげるが、都合のわるいデータについては終始一貫してかんげんに無視している。これでは実証的というにはほどとおい。また、うえであげた上田万年のことについていえば、イ・ヨンスク(1996)は「保守派＝伝統的国学」対「改革派＝科学的言語学」という二分法を使用し、前者に山田孝雄と時枝誠記、後者に上田万年と保科孝一を配し、「近代の言語認識」を「保守派と改革派との『国語』をめぐるヘゲモニー争い」(316頁)ととらえている。その構図も実証的といえるのか。どうも疑問だ。やはり「国語」という思想を批判するときには、実証的であるべきではなかろうか。

イ・ヨンスクの構図をもうすこし説明しておこう。たしかに、上田じしんが自分を「古学派」に対抗する「科学派」と自任しようとしたことがある(上田 1903: 181-4)。しかし、それはつぎのような事情によるのではないか。博言学科は明治一九(1886)年、帝国大学に設立されたにもかかわらず、明治二二年に上田が「単に一名の学生があるだけで、その勢力の微々たるは、実に浩嘆すべきであります」(上田 1903: 170)となげく状態であった。博言学科の勢力拡大のために、なにをなすべきか。上田は熟慮したけっか、おなじ日本語を対象としているものの、博言学は国学とちがうのだということを強調して、「古学派」と「科学派」という、コカ・コーラに対抗するペプシ・コーラのような対比宣伝にでたのではなかろうか。そして、それが帝国大学に博言学科をつくった加藤弘之や帝国大学文科大学長、外山正一など、上田の留学を後押ししてくれる政治家への精一杯のリップサービスとなったことは想像にかたくない。上田は西洋留学から帰国したあと、八杉の日記からうかがえるように、西洋の「科学的言語学」の動向をおさえることなどやっておらず、とくに文部省の専門学務長に就任以後は博言学科からもとおざかり、国語学科の主任教授に就任している。この点にかんしては、安田(1997: 44-5)が指摘するように、どうも上田を改革派とみるのには実証的なレベルで無理があるようにおもうのだが、どうだろうか。イ・ヨンスクは「保守派」対「改革派」という構図を優先させるがため、実証的なデータをなおざりにしてしまった。筆者には、そうおもえてならない。もっとも、こうした構図を強調したおかげで、本としてはずっとおもしろくなった。イが実証的であるよりも物語性を重視しただけなのかもしれないが、それはご本人のみがしる。

話がイの著作にずれてしまった。そこで、言語学外部からの言語学批判についてのまとめとして、つぎのような点を指摘しておきたい。言語学外部から、言語学を批判すべき点はいくらでもある。しかし、その批判を西洋で流行のオリエンタリズム批判やカルチュラル・スタディーズに依拠するような形でおこなっては、あまり有効な批判にはならない。言語学が西洋中心主義であるという批判を、西洋で流行の理論によって、日本において批判する。西洋人たちが西洋でおこなっていることを、わざわざ登場人物を日本人にかえて猿真似することに、どれほ

どの意味があるというのか。また、日本の言語学者はそういった批判をきいても、自分たちへの批判だとはかんじないだろう。言語理論と言語データだけに専念している言語学者たちは、現代思想の潮流にうとく、そこでどんな批判がおころうとも関心がないし、その批判がなぜおこっているのかもわからない。そうした構図は言語学外部の人たちも同様である。言語学内部において、比較言語学とはかけはなれたミニマリスト・プログラムや認知言語学へ関心がむいているときに、比較言語学の批判をしても、言語学内部の人がえがく言語学像とはすでにずれがある。まして、言語学をまちがって理解したうえで批判を展開しても、わらいものとなるだけである。現代思想の潮流にうといことをせめるのであれば、そのまま言語学の潮流にうといことをせめられるだけである。あえて問題があるとするならば、おたがいの意志疎通ができないほど、学問が細分化してしまったことをなげくぐらいだ。

こうした溝をふかめるような批判は、けっきょく言語学者にむけられるよりも、たとえば、カルチュラル・スタディーズのサークルにおけるスケープゴートの役割ぐらいしかはたさない。それよりも、もっと有効な批判がある。それは、欧米で流行の言語理論である演繹的モデルの横行によって、言語データが尊重されていないという批判である。欧米の言語理論に日本語のデータをうめこんでよしとする風潮がある。これと同様に、言語学外部でも、オリエンタリズム批判とか、カルチュラル・スタディーズといった西洋からやってきたモデルがあって、それにデータをあてはめただけの論議をよくみかける。「はじめに演繹的モデルありき」に対する批判であれば、言語学内部でも、言語学外部でも、共通の土壌がうみだせる。その演繹的手法批判のためには、実証的なデータのつみかさねが重要である。たとえば、上田万年を批判するのであれば、さいしょから国語という思想の創設者とみなして批判するのではなく、筆者がういで提示した八杉の日記のような資料をつかって、あらたなる上田万年像にせまる。そうした姿勢がだいじだ。まだまだしらべると、いろいろなデータを発掘することは可能であるはずだ。そうしたデータにもとづく実証的な批判をおこなうことによって、言語学内部の人たちにもわかるような批判が展開できるのではないだろうか。筆者の分析が、言語学外部からの批判の応援歌となることをねがってやまない。

ここでは、「日本語系統論がなぜはやらなくなったか」というよりも、日本語系統論がはやらなくなったけっか、どうなったか、それについて考察した。ひとことでいえば、日本語系統論という方法そのものへの批判が、言語学への批判とともに、言語学外部からおこったのである。ただし、その言語学批判は言語学者にむけられたものというよりも、オリエンタリズム批判にのりおけていないという存在証明のためといったおもむきがある。こうした言語学内外の立場のちがいについて、筆者なりに分析をこころみてきた。これらの立場のちがいを相関関係としてえがけば、つぎのようにいえるだろう。言語学外部でナショナリズムのたかまりがあったころ、言語学内部では日本語系統論がはやり、言語学外部でオリエンタリズム批判がたかまったころ、言語学内部での日本語系統論がすたれる。あるいは、言語学内部で日本語系統論がはやったころ、言語学外部でナショナリズムのたかまりがあり、言語学内部で日本語系統論がすたれたころ、言語学外部でオリエンタリズム批判がたかまる。どちらがさきで、どちらがあとなのか。言語学外要因がさきにあるとかがえるのが一般的だろうが、そのへんの判断は

みなさんにおまかせする。こうした相関関係をあきらかにして、この章をおえることにする<sup>14</sup>。

#### 4. おわりに：日本語系統論は復活するのか

これまで、日本語系統論の現在について、その過去にふれながらのべてきた。日本語系統論の現在については、言語学内部においても、言語学外部においても、日本語系統論に対する関心はかんぜんに下火である。そして、この日本語系統論に対する懐疑や回避は、なかなか解消されそうにはない。それが筆者の現状理解だ。それでも、本共同研究会を幹事として運営にあたった以上、未来についてかたならなければ、共同研究会の班長にもうしわけない。そこで、筆者の独断と偏見にもとづいて、こんごの行方をうらなってみよう。

すでに1. 1. であげた以外に、あらたなる比較歴史言語学理論が提唱され、その新理論による検証の可能性はおおいにある。生成文法をはじめとする統語論にもとづく共時的な言語理論がもてはやされるなかでも、グリーンバーグやニコルスのような新学説が誕生した。将来において、これまでの比較方法とおなじぐらいコンセンサスがえられるような比較歴史言語学理論がうみだされる可能性はじゅうぶんある。もちろん、そのぎゃくに、こうした理論がうみだされない可能性も否定できない。いずれにせよ、音韻対応とはことなる、もっと歴史的に安定した形態論的、統語論的特徴が提示される可能性のほうがたかいようにおもう。亀井孝(1973: 453、1992: 123)は意味論に注目しているが、意味論的なアプローチはあまりされてこなかっただけに、意味論からなにかがうみだされるかもしれない。

比較歴史言語学を根底からくつがえすコペルニクスの転回がおこる可能性にくらべると、あらたなる言語データの発見のほうが可能性としてはたかいかもしれない。吉野ヶ里や三内丸山のような遺跡がみつかり、しかも大量の文字資料が発見されれば、これまでの古代日本語の知識は一変するだろう。こうした遺跡の発見は日本だけの話ではない。朝鮮半島や中国大陸で、古代日本のことがわかる資料が発掘される可能性もじゅうぶんある。これまで発見されていなかった古代文字がみつかりでもしようものなら、この解読をめぐる、言語学内外の研究者が関心をよせることはまちがいない。こうした機会によって、日本語系統論が復活することもありうる。けっして夢物語ではないとおもうのだが、はたしてその日までいきているかとなるとさだかではない。

第二次世界大戦後の日本語系統論ブームは、言語学内部の要請というよりは日本人の敗戦後

<sup>14</sup>日本語系統論にかんする論文集に、歴史家や社会学者が批判する言語学の政治性という問題をもりこむことが妥当なのか。正直いって、なやんだ。筆者はどちらにも関心をもって、こうした言語学批判をこんにちまでみてきた。しかし、これまで言語学の側も批判する側もどちらもワンサイドゲームで、いっこうに議論がかみあわないことに、いらだちをおぼえてきた。いつか機会があれば、こうした問題に発言したいとずっとかんがえてきた。筆者が同様の発表を共同研究会でおこなったときに、たまたまゲストスピーカーとしてコーネル大学のウィットマン博士が列席しておられた。コーネル大学でいつも言語学批判の矢面にたたさされているウィットマン博士は、じっさいカルチュラル・スタディーズからの批判が比較言語学研究の士気に影響している事実があることを指摘し、こうした分析が役にたつと評価してくれた。そのリップサービスに意をつよくして、論文集でも、こうした問題をかいてみたが、その評価はみなさんにゆだねることにしたい。

のアイデンティティーさがしといった側面はいなめない。とくに、皇国史観の呪縛から解放されて、日本人とは、日本文化とは、あるいは日本語とは、といった問題が真剣に討議された時期だったのである。その伝でいけば、日本語系統論が復活とするならば、やはり言語学外部の要因がおおきいようにおもう。その言語学外部の要因がなにをさすのか。残念ながら、筆者はそのこたえを用意する立場にはない。

未来について、あまりかたることばがみつからない。それほど、日本語系統論の現状はひどい。ただし、0. 序でものべたように、ボビン班長はじめ、日本人以外の言語学者が流暢な日本語を駆使して、日本語系統論にとりくむ姿には、一条の光明をみたおもいである。まだまだ研究が未開拓な分野はあり、それらがあらたなデータを提示する可能性もある。共同研究会の幹事をつとめることで、日本語系統論に対する筆者の無知さを痛感したが、これを機に、日本語系統論の行方をしっかりとみまもっていきたい。

(補注1) 校正中に Don Ringe(2002)による書評が *Journal of Linguistics* 38(2): 415-420 に掲載されているのをした。それによると、つぎのような痛烈な批判をおこなっている。

“One is seldom asked to review a book that proves to contain nothing of value, but that is unfortunately true of this volume (hereafter IECR). In what follows I will briefly discuss some of the book’s fatal shortcomings. The list is NOT exhaustive; valid objections to IECR can be multiplied almost *ad libitum*.”

(補注2) 校正中に、Friedrich Müller (1875-88) *Grundriss der Sprachwissenschaft* を大阪外国語大学図書館から借りることができた。大阪外大で確認されたのは三巻だけで、それぞれが二部(合計六冊)からなる。しかし、インターネット検索でしらべると、第四巻『1877-87の補遺』もあり、ぜんぶで四巻(七分冊)の大著である。そのうち、*Einleitung in die Sprachwissenschaft*『言語学入門』は第一巻の第一部で、170頁ほどのコンパクトな本だ。第一巻第二部から第三巻は世界中の人種を第一巻第二部「縮れ毛人種」、第二巻「直毛人種」、第三巻を「巻き毛人種」にわけ、第二巻では第一部で「オーストラリア人種、ヒュペルポレイオス人種(北極に住むといわれている伝説の民族)、アメリカ人種」の言語を、また第二部では、「マレーシア人種とモンゴル人種」の言語を、そして第三巻では第一部で「ヌバ人種とドラヴィダ人種」の言語を、第二部では「地中海人種」の言語を、それぞれ扱っており、いわば世界の言語概説となっている。フリードリヒ・ミュラーの『言語学入門』が日本の言語学形成時にどのような影響をあたえたか。それはこんごの研究課題である。

## 参考文献

### (和文文献)

- 東照二 (2000) 『バイリンガリズム：二言語併用はいかに可能か』 東京：講談社現代新書。
- 安部麻矢 (2002) 「マアの人々の言語使用の実際」 稗田乃編『言語間の接触において生じる言語現象』(文部科学省科学研究費特定領域研究『環太平洋の「消滅の危機に瀕した言語」にかんする緊急調査研究』成果報告書 B002)、大阪：大阪学院大学. 8-33 頁。
- イ・ヨンスク (1996) 『「国語」という思想』 東京：岩波書店。
- 家本太郎・児玉望・山下博司・長田俊樹 (1996) 『「日本語=タミル語同系説」を検証する—大野晋『日本語の起源 新版』をめぐって』『日本研究』13：248-169。
- 井上哲次郎 (1943) 『懐旧録』 東京：春秋社。
- 上田万年 (1895 a) 「批評 Dichtergüsse aus dem Osten. ドクトル、フローレンツ訳」『帝国文学第二』98-99。  
—— (1895 b) 「フローレンツ先生の和欧詩歌比較考を読む」『帝国文学第五』51-59。  
—— (1895 c) 「本居春庭」『帝国文学第七』83-90。  
—— (1895 d) 「再びフローレンツ先生に答ふ」『帝国文学第九』72-76。  
—— (1903) 『国語のため第二』 東京：富山房。  
—— 新村出筆録、柴田武校訂 (1975) 『言語学』 教育出版。
- 大野晋 (1980) 『日本語の世界 1：日本語の成立』 東京：中央公論社。  
—— (1981) 『日本語とタミル語』 東京：新潮社。  
—— (1994) 『新版 日本語の起源』 東京：岩波新書。  
—— (1996) 「『タミル語=日本語同系説に対する批判』を検証する」『日本研究』15：248-186。  
—— (2000) 『日本語の形成』 東京：岩波書店。  
—— (2002) 『日本語の教室』 東京：岩波新書。
- 長志珠絵 (1993) 「言語学の受容」『立命館大学人文科学研究紀要』59：227-247。  
—— (1998) 『近代日本と国語ナショナリズム』 東京：吉川弘文館。
- 長田俊樹 (1996) 「序：『日本語=タミル語同系説』を検証する—大野晋『日本語の起源 新版』をめぐって」『日本研究』13：248-243。  
—— (1998) 「比較言語学・遠隔系統論・多角比較—大野教授の反論を読んで」『日本研究』17:404-373。  
—— (2002) 『新インド学』 東京：角川叢書。
- 風間喜代三 (1978) 『言語学の誕生—比較言語学小史—』 東京：岩波新書。
- 金子亨 (2001) 「Uëda Mannen のこと」『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』4：1-23。
- 上沼八郎 (1962) 『人物叢書 伊沢修二』 東京：吉川弘文館。
- 亀井孝 (1971) 『亀井孝論文集 1 日本語学のために』 東京：吉川弘文館。  
—— (1973) 『亀井孝論文集 2 日本語系統論のみち』 東京：吉川弘文館。  
—— (1992) 『亀井孝論文集 6 言語・諸言語・倭族語』 東京：吉川弘文館。  
—— (1995) 『ことばの森』 東京：吉川弘文館。  
—— 河野六郎・千野栄一編 (1986-95) 『言語学大辞典』全6巻. 東京：三省堂。

- 川本崇雄 (1980) 『日本語の源流—南島語起源論』東京：講談社現代新書。
- 岸本通夫 (1971) 『ユーラシア語族の可能性』神戸：神戸学術出版。
- 小林英夫 (1936) 「言語学における目的論」小林 (1976 : 245-84) に所収。  
 ——— (1976) 『小林英夫著作集1 言語学論集1』東京：みすず書房。
- 小森陽一 (2000) 『日本語の近代』東京：岩波書店。
- 酒井邦嘉 (2002) 『言語の脳科学』東京：中公新書。
- 佐藤規祥 (1994) 「印欧語と他の語族との間の系統論的關係について」『名古屋大学言語学論集』10 : 1-34。
- 清水康行 (1996) 「上田万年をめぐる二、三のことども—専門学務局長就任から国語調査委主事辞任まで—」  
 『山口明穂教授還暦記念国語学論集』東京：明治書院。518-538。
- シュッハルト、フーゴ、小林英夫・林長男共訳。(1935) 「音韻法則について少壮文法学派を駁す」『方言』  
 5 (7) : 1-31。
- 鈴木広光 (1993) 「日本語系統論・方言圏論・オリエンタリズム」『現代思想』21 (7) : 209-217。  
 ——— (1994) 「上田万年とW. D. ホイットニー—近代日本「国語」政策の基—」『国語学』176 :  
 (1) - (13)。
- 田中克彦 (1989) 「ヒフミの倍加説」『国家語を越えて』東京：筑摩書房。  
 ——— (1993) 『言語学とは何か』東京：岩波新書。  
 ——— (1997) 「言語学の日本の受容—ガーベレンツ、ソシュール、上田万年—」田中克彦・山脇直司・  
 糟谷啓介編『言語・国家、そして権力』東京：新世社。3-20。  
 ——— (2000) 『「スターリン言語学」精読』東京：岩波現代文庫。
- 田中幸子 (2002) 「ピジンからクレオールへ」『月刊言語』31 (4) : 44-50。
- トッド、ロレット、田中幸子訳 (1986) 『ピジン・クレオール入門』東京：大修館書店。
- セイス、上田万年・金沢庄三郎共訳 (1898) 『言語学』東京：金港堂書籍。
- 服部四郎 (1951) 『音韻論と正書法』東京：研究社。  
 ——— ([1959] 1999) 『日本語の系統』東京：岩波文庫。  
 ——— 編 (1984) 『言語学ことはじめ』服部四郎発行。
- 保科孝一 (1937) 「故上田先生を語る」『国語と国文学』14 (12) : 117-123。
- 堀井令以知 (1997) 『比較言語学を学ぶ人のために』京都：世界思想社。
- 堀川貴司 (1992) 「チェンバレン帝大教師時代の資料」『汲古』21 : 16-22。
- ビッカートン、D. 筧寿雄・西光義弘・和井田紀子訳 (1985) 『言語のルーツ』東京：大修館書店。  
 ——— 筧寿雄監訳 (1998) 『ことばの進化論』東京：大修館書店。
- フローレンツ、カール (1895 a) 「日本詩歌の精神と欧州詩歌の精神との比較考」『帝国文学第三』1-17。  
 ——— (1895 b) 「上田文学士に答ふ」『帝国文学第七』69-76。
- ブイコフスキー、高木弘訳編。(1946) 『ソヴェート言語学』象徴社。
- 松本克己 (1975) 「古代日本語母音組織考—内的再建の試み—」『金沢大学法文学部論集』22 : 83-152。  
 ——— (1994) 「日本語系統論の見直し—マクロの歴史言語学からの提言—」『日本語論』2 (11) : 36-51。  
 ——— (1995) 『古代日本語母音論—上代特殊仮名遣の再解釈—』東京：ひつじ書房。  
 ——— (1998 a) 「形容詞の品詞的タイプとその地理的分布」『月刊言語』27 (3) : 18-25。

- (1998 b) 「流音のタイプとその地理的分布－日本語ラ行子音の人類言語史的背景」『一般言語学論叢』1 : 1-48。
- (1998 c) 「ユーラシアにおける母音調和の二つのタイプ」『言語研究』114 : 1-35。
- (2000 a) 「日本語の系統と『ウラル・アルタイ説』」『日本エドワード・サビア協会研究年報』14 : 1-25。
- (2000 b) 「世界諸言語の類型地理と言語の遠い親族関係」遠藤光暁編『言語類型地理論シンポジウム論文集』科研費研究成果報告書 103:96-135。
- (2003) 「日本語の系統－類型地理論的考察－」本論文集。
- 松本信廣 (1931) 「オーストロアジア語に関する諸問題」、松本 (1978 : 197-229) に所収。
- (1947) 「日本語と南方語の関係」、松本 (1978 : 370-392) に所収。
- (1978) 『日本民族文化の起源 2 古代の船・日本語と南方語』東京：講談社。
- 村山七郎 (1950) 「ソヴィエト言語学とスターリンの批判」『思想』317:57-66。
- 本居清造 (1895) 「本居春庭伝補遺」『帝国文学第九』80-85。
- 八杉貞利、和久利誓一編 (1970) 『新縣居雜記』東京：吾妻書房。
- 安田敏朗 (1997) 『帝国日本の言語編制』横浜：世織書房。
- (1999) 『<国語>と<方言>のあいだ－言語構築の政治学』京都：人文書院。
- 安田徳太郎 (1955) 『万葉集の謎』東京：光文社。
- 山本正秀 (1965) 『近代文体発生の史的的研究』東京：岩波書店。
- ロメイ、スーザン、土田滋・高橋留美訳。(1997) 『社会のなかの言語』東京：三省堂。

## (欧文文献)

- Adelaar, William F.H. (1989) Review of Greenberg (1987a). *Lingua* 78:249-255.
- Aitchison, J. (2000) *The seeds of speech: Language origin and evolution*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Allott, Robin (2001a) *The natural origin of language*. Knebworth: Able Publishing.
- (2001b) *The great mosaic eye: language and evolution*. Lewes: Book Guild.
- Anderson, Gregory D.S. and Norman Zide (2001) Recent advances in the reconstruction of the Proto-Munda (Austroasiatic) verb. In: Laurel Brinton (ed) *Historical linguistics 1999*, 13-30. Amsterdam: John Benjamin.
- and ————— (2002) Issues in Proto-Munda and Proto-Austroasiatic nominal derivation: the bimoraic constraint. In: Marlys A. Macken (ed) *Papers from the 10<sup>th</sup> annual meeting of the Southeast Asian linguistic society*, 55-74. Tempe: Arizona State University Press.
- Arends, Jacques, Pieter Muysken and Norval Smith (eds.) (1995) *Pidgins and Creoles: An introduction*. Amsterdam: John Benjamin.
- Aston, William George (1879) A comparative study of the Japanese and Korean languages. *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland* 11:317-364.
- Bakker, Peter (2000a) Convergence intertwining: an alternative way towards the genesis of mixed



- languages. In: Gilbers, Nerbonne & Schaeken (eds.), 29-35.
- (2000b) Rapid language change: creolization, intertwining, convergence. In: Renfrew, McMahon & Trask (eds.) 585-620.
- and Maarten Mous (eds.) (1994) *Mixed languages: 15 case studies in language intertwining*. Amsterdam: Institute for Functional Research into Language and Language Use.
- and P.Muysken(1995)Mixed languages and language intertwining. In: Arends.Muysken & Smith(eds).41-84.
- Benedict, Paul K. (1990) *Japanese/Austro-Thai*. Ann Arbor: Karoma.
- Bichakjian, B.H. (2002) *Language in a Darwinian perspective*. Frankfurt: Peter Lang.
- de Boer, Bart (2001) *The origins of vowel systems*. Oxford: Oxford University Press.
- Bomhard, Allan R. (1984) *Toward Proto-Nostratic: A new beginning in the reconstruction of Proto-Indo-European and Proto-Afro-Asiatic*. Amsterdam: John Benjamin.
- and John C. Kerns (1994) *The Nostratic macrofamily: A study in distance linguistic relationship*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Bright, William (ed) (1992) *International encyclopedia of linguistics*. 4 Volumes. Oxford: Oxford University Press.
- Briscoe, E. J. (ed) (2002) *Linguistic evolution through language acquisition: Formal and computational models*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bulatova, R. V. (1989) Illic-Svityc: A biographical sketch. In: Shevoroshkin (ed) 14-28.
- Burrow, Thomas & M. B. Emeneau (1961) *A Dravidian etymological dictionary*. Oxford: Clarendon Press.
- & ————— (1984) *A Dravidian etymological dictionary*. Revised edition. Oxford: Clarendon Press.
- Bussmann, Hadumd (ed) Trauch & Kazzari (tr) (1996) *Routledge dictionary of language and linguistics*. German edition in 1990. New York: Routledge.
- Campbell, Lyle (1988) Review of Greenberg (1987a). *Language* 64:591-615.
- (1998) Nostratic: A personal assessment. In: Brian D. Joseph and Joe Salmons (eds.), 107-151.
- Cangelosi, Angelo and Dominico Parisi (eds.) (2001) *Simulating the evolution of language*. London: Springer Verlag.
- Cavalli-Sforza, L.L. (1991) Genes, peoples and languages. *Scientific American* 265:104-110.
- , A. Piazza, P. Menozzi, and J. Mountain (1988) Reconstruction of human evolution: Bringing together genetic, archaeological, and linguistic data. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America* 85 (16) : 6002-6006.
- Chafe, Wallace (1987) Review of Greenberg (1987a). *Current Anthropology* 28:652-653.
- Chamberlain, Basil Hall (1889) *A handbook of colloquial Japanese*. London: Trübner.
- Cristiansen, Morten and Simon Kirby (eds.) (2003) *Language evolution: The states of the art*. Oxford:

Oxford University Press.

- Coetsem, Frans van (2000) *A general and unified theory of the transmission process in language contact*. Heidelberg: Universitätsverlag C. Winter.
- Corballis, M.C. (2002) *From hand to mouth: the origins of language*. Princeton : Princeton University Press.
- Croft, William (2001) Joseph Harold Greenberg. *Language* 77 (4) : 815-30.
- (2002) On being a student of Joe Greenberg. *Linguistic Typology* 6 (1) : 3-8.
- DeGraff, Michel (ed) (1999) *Language creation and language change: Creolization, diachrony, and development*. Massachusetts: MIT Press.
- Dempwolff, O (1934-1938) *Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes*. Berlin: Reimer.
- Doerfer, G. (1995) The recent development of Nostratism. *Indogermanische Forschungen* 100:252-267.
- Dolgopolsky (1986) A probabilistic hypothesis concerning the oldest relationships among the language families of northern Eurasia. In: Shevoroshkin and T.L.Markey (eds.) 27-50.
- Donegan, Patricia J. (1993) Rhythm and vocalic drift in Munda and Mon-Khmer. *Linguistics in the Tibeto-Burman Area* 16 (1) : 1-43.
- Durie, Mark and Malcolm Ross (eds.) (1996) *The comparative method reviewed: regularity and irregularity in language change*. New York: Oxford University Press.
- Emeneau, Murray B. (1956) India as a linguistic area. *Language* 32:3-16.
- Gilbers, D., J. Nerbonne and J. Schaecken (eds.) (2000) *Languages in contact*. Amsterdam: Rodopi.
- Gildea, Spike (ed) (2000) *Reconstructing grammar: Comparative linguistics and grammaticalization*. Amsterdam: John Benjamin.
- Goddard, Ives (1987) Review of Greenberg (1987a) . *Current Anthropology* 28 (5) : 656-657.
- Greenberg, Joseph H. (1987a) *Language in the Americas*. Stanford: Stanford University Press.
- (1987b) Author's précis. *Current Anthropology* 28 (5) : 647-652.
- (1996) The “Greenberg hypothesis”. *Science* 274:1447
- (2000) *Indo-European and its closest relatives: The Eurasiatic language family. Vol. 1 Grammar*. Stanford: Stanford University Press.
- (2002) *Indo-European and its closest relatives: The Eurasiatic language family. Vol. 2 Lexicon*. Stanford: Stanford University Press.
- , Christy G. Turner II, and Stephen L. Zegura (1986) The settlement of the Americas: A comparison of the linguistic, dental, and genetic evidence. *Current Anthropology* 27 (5) : 477-497.
- Haspelmath, Martin, Ekkehard Koenig, Wulf Oesterreicher and Wolfgang Raible (eds.) (2001) *Language typology and language universals*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Helmbrecht, Johannes (2001) Head-marking vs. dependent-marking languages. In: Haspelmath et al (eds.), 1424-32.
- Holm, J. (2000) *An introduction to Pidgins and Creoles*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Illic-Svityc, V.M. (1971, 1976, 1984) *Opyt sravnenija nostraticheskix jazykov*. Moscow.
- Jackendoff, R. (2002) *Foundations of language: Brain, meaning, grammar, evolution*. Oxford: Oxford University Press.
- Kaiser, M. and V. Shevoroshkin (1988) Nostratic, *Annual Review of Anthropology*. 17:309-329.
- Knight, Chris, Michael Studdert-Kennedy and James Hurford (eds.) (2000) *The evolutionary emergence of language: Social function and origins of linguistic form*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Koerner, Konrad (1995) *Professing linguistic historiography*. Amsterdam: John Benjamin.
- Lefebvre, Claire (1998) *Creole genesis and acquisition of grammar: The case of Haiti Creole*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Manaster-Ramer, Alexis (1993) On Illic-Svityc's Nostratic theory. *Studies in Language* 17:205-250.
- Matisoff, James A. (1990) On megalocomparison. *Language* 66 (1) : 106-120.
- Matsumoto Nobuhiro (1928) *Le Japonais et les langues Austroasiatiques, etude de vocabulaire comparé*. Paris: Librairie Orientaliste Paul Geuthner.
- McMahon, A.M.S. and R. McMahon (1995) Linguistics, genetics and archaeology: Internal and external evidence in the Amerind controversy. *Transactions of the Philological Society* 93 (2) : 125-225.
- McWhorter, John H. (1997) *Towards a new model of Creole genesis*. New York: Peter Lang.
- (1998) Identifying the Creole prototype: Vindicating a typological class. *Language* 74 (4) : 788-818.
- (ed.) (2000) *Language change and language contact in Pidgins and Creoles*. Amsterdam: John Benjamin.
- Mous, Maarten (1994) Ma'a or Mbugu. In: Bakker and Mous (eds.), 175-200.
- Mühlhäusler, Peter (2001) Typology and universals of Pidginization. In: Haspelmath et al (eds.), 1648-55.
- Müller, Fridrich (1875-1888) *Grundriss der Sprachwissenschaft* Wien : Alfred Holder
- Muysken, Pieter (2000) *Bilingual speech: A typology of code-mixing*. Cambridge: Cambridge University Press.
- (2001) Creolization. In: Haspelmath et al (eds.), 1656-67.
- Myers-Scotton, Carol (1998) A way to dusty death: the Matrix Language turnover hypothesis. In: L. A. Grenoble and L. J. Whaley (eds.) *Endangered languages: Language loss and community response*. Cambridge: Cambridge University Press, 289-316.
- (2002) *Contact linguistics: Bilingual encounters and grammatical outcomes*. Oxford: Oxford University Press.
- Nichols, Johanna (1986) Head-marking and depending-marking grammar. *Language* 62 (1) : 56-119.
- (1992) *Linguistic diversity in space and time*. Chicago: The University of Chicago Press.
- (1995) Diachronically stable structural features. H. Andersen (ed) *Historical Linguistics 1993*. 337-55. Amsterdam: John Benjamin.

- Pedersen, Holger (1903) *Türkische Lautgesetze. Zeitschrift der Deutschen Morgenlandischen Gesellschaft* 57:535-561.
- Pinnow, Heinz=Jürgen (1959) *Versuch einer historischen Lautlehre der Kharia Sprache*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Pulvermuller, Friedmann (2003) *The neuroscience of language: On brain circuits of words and serial order*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rankin, Robert L. (1992) Review of Greenberg (1987a). *International Journal of American Linguistics* 58 (3) : 324-353.
- Renfrew, Colin, April McMahon and Larry Trask (2000) *Time depth in historical linguistics*. Cambridge: McDonald Institute for Archaeological Research.
- Renfrew, Colin and Daniel Nettle (eds.) (1999) *Nostratic: examining a linguistic macrofamily*. Cambridge: McDonald Institute for Archaeological Research.
- Ross, Malcolm D. (1996) Contact-induced change and the comparative method: cases from Papua New Guinea. In: Mark Durie and Malcolm Ross (eds.), 180-217.
- Salmons, Joseph C. and Brian D. Joseph (eds.) (1998) *Nostratic: shifting the evidence*. Amsterdam: John Benjamin.
- Sasse, Hans-Jürgen (2001) Typological changes in language obsolescence. In: Haspelmath et al (eds), 1668-77.
- Schuchardt, Hugo. T.L. Markey (ed. & tr.) (1979) *The ethnography of variation : selected writings on Pidgins and Creoles*. Ann Arbor : Karoma
- Gilbert, Glenn (ed. & tr.) (1980) *Pidgin and Creole languages: selected essays by Hugo Schuchardt*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sebba, Mark (1997) *Contact languages: Pidgins and Creoles*. London: Macmillan
- Singh, Ishtla (2000) *Pidgins and Creoles: An Introduction*. London: Arnold.
- Shevoroshkin, V. (ed.) (1989) *Explorations in language macrofamilies*. Bochum: Universitätsverlag Dr. N. Brockmeyer.
- (ed.) (1992) *Reconstructing languages and cultures*. Bochum: Universitätsverlag Dr. N. Brockmeyer.
- and T.L. Markey (eds.) (1986) *Typology, relationship and time*. Karoma, Ann Arbor.
- Smith, Norval and Tonjes Veenstra (eds.) (2001) *Creolization and contact*. Amsterdam: John Benjamin.
- Starostin, Sergej (1989) Nostratic and Sino-Caucasian. In: Shevoroshkin (ed) 42-66.
- Thomason, Sarah G. (1997) Ma'a (Mbugu). In: Thomason (ed), 469-87.
- (2001a) Contact-induced typological change. In: Haspelmath et al. (eds), 1640-8.
- (2001b) *Language contact: An introduction*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- (ed.) (1997) *Contact languages: A wider perspectives*. Amsterdam: John Benjamin.
- and Terrence Kaufman (eds.) (1988) *Language contact, Creolization, and genetic*

*linguistics*. Berkeley: University of California Press.

Trubetzkoy, Nikolay (1928) Proposition 16. In: *Actes du premier congrés international de linguists*, 17-8. Leiden: Sijthoff.

Tryon, Darrell T. (ed.) (1994) *Comparative Austronesian dictionary*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Vovin, Alexander (1998) Nostratic and Altaic. In: Salmons and Joseph (eds.), 257-270.

————— (1999) Altaic evidence for Nostratic. In: Renfrew and Nettle (eds.), 367-386.

————— (2001) North East Asian historical-comparative linguistics on the threshold of the third millennium. *Diachronica* 18 (1) : 93-137.

Winford, Donald (2003) *An introduction to contact linguistics*. Oxford: Blackwell.

Wray, Alison (ed.) (2002) *The transition to language*. Oxford: Oxford University Press.

Zide, Norman H. and Gregory D.S. Anderson (2001) The Proto-Munda verb : some connections with Mon-Khmer. In : Bhaskararao & Subbarao (eds.) *Yearbook of South Asian Languages and Linguistics 2001*, 517-40. Delhi : Sage.

(なお、参考文献のなかには、本文で言及していない文献もあるが、小論を執筆するさいに、参考とした文献と理解していただければさいわいである)

## Why Japanese Linguists are not Taking the Debate on the Origins of the Japanese Language Seriously?

OSADA Toshiki

*Research Institute for Humanity and Nature/  
International Research Center for Japanese Studies, Kyoto*

**Keywords:** the origins of Japanese language, mixed languages, linguistic typology, HATTORI Shirô, UEDA Kazutoshi.

In Japan in the 1950s and 60s, to study linguistics meant to seek the origins of Japanese language. Nowadays, however, few Japanese linguists are interested in the debate on the origins of the Japanese language. Thus in this paper, I try to describe the reasons why Japanese linguists aren't taking the debate on the origins of Japanese language seriously.

According to my analysis, there are two main reasons: linguistic and extra-linguistic. From a linguistic point of view, although the most notable Japanese linguist, HATTORI Shirô, adopted the rigid comparative method to Japanese language nobody came to any tenable conclusions. From an extra-linguistic point of view, nobody is enthusiastic enough to look for the origins of Japanese as they were in the heyday of nationalism in 1950s and 60s. Then, some social scientists accused UEDA Kazutoshi as an initiator of the nationalistic idea 国語 (national language). Because of this sentiment, people stopped taking the debate on the origins of Japanese language seriously.

I propose that this situation should be changed because of new data and because of the new theoretical frameworks including theories regarding mixed languages, linguistic typology and so on.